

から、提示した装着案以外の尻繫に伴う鉸具の可能性もある。

類例は、静岡県高尾向山3号墳・宮崎県小木原地下式横穴〔宮崎県教委1973〕・千葉県鶴崎天神台遺跡3号墳例・埼玉県どうまん塚古墳例〔小出1963〕が該当する。

B-1類(Fig. 3)

轡1点に対して、辻金具3点、鉸具1点を基本とする面繫のみの馬装である。「額革」の中央に辻金具1点を配し、「項革」との接点は、縫い合わせないしは、鋸止めの加工がなされたと推定できるが(Fig. 3)、いずれも出土品からの明確な根拠はない。

類例は、宮崎県大萩27号地下式横穴〔宮崎県教委1974〕・奈良県寺口忍海古墳群H-16号墳〔新庄町教委・榎考研1988〕・群馬県古海原前古墳群1号墳第4主体部例〔大泉町教委1986〕が該当する。

B-2類(Fig. 3)

面繫の形態はB-1類と、尻繫の形態はA-2類と同じである折衷の馬装である。茨城県西大塚古墳例では、A-2類で触れた雲珠に伴う杏葉が、有機質ではなく鉄地金銅張の剣菱形杏葉として3点出土している。本例では、環状雲珠と剣菱形杏葉が伴っており、A-2類や後述するE類の尻繫の基本型ともなるものである。

類例は、茨城県西大塚古墳例〔日立市教委1987〕が該当する。

C-1類(Fig. 3)

轡1点に対して、辻金具3点、鉸具2点を基本とする面繫のみの馬装である。「額革」の中央に辻金具1点を配する。鉸具は、「額革」と「項革」に1点ずつ配する。出土状態では轡と鉸具1点が西側に一群として検出され、約54cm隔てて辻金具2個と鉸具を東側で一群として検出しており、両者の間隔がやや離れていることから、本来の装着状態のまま副葬されたものかは疑問が残る。

このため、B類で復元した配置を基本的には踏襲し、鉸具の位置は次に述べる新沢千塚112号墳の出土状態を基本とした。

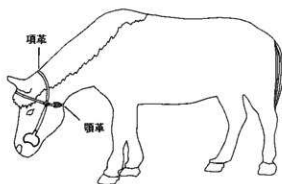
類例は奈良県新沢千塚312号墳例〔榎考研1981〕が該当する。

C-2類(Fig. 4)

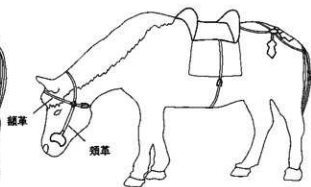
面繫の形態はC-1類と同じである。雲珠は検出していないが、鉄製の輪鍔が1点出土するとともに、鉸具が面繫以外に2点存在する。鍔の存在から鞍を想定し、鞍を固定するための腹帯に装着する鉸具と、鍔の高さ調節並びに着脱のために力革に装着する鉸具を想定した。

出土状態からは、轡の延長線上で2点出土した辻金具の一方に「L字状」に鉸具を2箇所配している様子が観察できることから、「額革」と「項革」の位置に想定した。「項革」の位置と判断した理由は、轡と辻金具を結ぶ線上(「額革」の位置)から出土しているのではなく、轡と辻金具の延長線

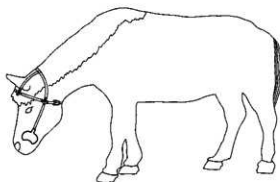
A-1



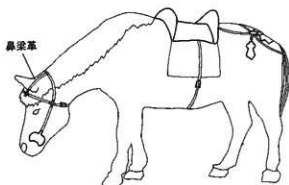
A-2



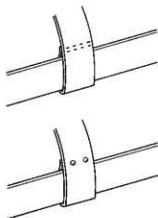
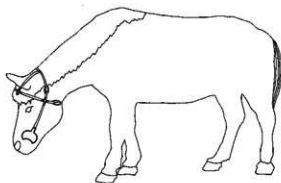
B-1



B-2



C-1



B・C・F類における「項革」と「鼻梁革」
の接合復元案（縫い合せ：鉄留）

Fig. 3 鉄製楕円形鏡板付轡の馬装復元図(1)

上で、辻金具を超えた位置で出土しているためである。なお、もう一点の鉸具は、2点の辻金具とほぼ平行な位置から出土していることから「額革」と想定した。

類例は奈良県新沢千塚112号墳例〔榎考研1981〕が該当する。

D類(Fig. 4)

轡1点に対して、辻金具4点、鉸具2点を基本とする面繫のみの馬装である。「額革」と「鼻革」をそれぞれ固定するために辻金具を配し、「頬革」と「額革」にそれぞれ鉸具が1点ずつ伴うと想定したが、出土状態からの根拠は全くない。宮代氏は本類を「複条系・辻金具4点装着」と呼称し、下小坂3号墳を基に復元図を提示している〔宮代1997〕。

類例は埼玉県下小坂3号墳例〔川越市史編纂室1972〕が該当する。

E類(Fig. 4)

先のD類から鉸具1点を除いた形態で、轡1点に対して、辻金具4点、鉸具1点を基本とする。鉸具の位置は出土状態から特定することはできなかったため、「頬革」の部分とした。このほか、鉄製の輪鏝1点と環状雲珠1点、剣菱形杏葉1点がそれぞれ出土しているが、固定のための金具や着脱用の鉸具等は一切検出していない。

静岡県愛野向山B12号墳例が該当する。また、福井県きよしの2号墳例〔三方町教委1975〕では、復元案も提示されているが〔宮代1997〕、同墳からは環状鏡板付轡が1点伴っており、辻金具8点がすべて鉄製楕円形鏡板付轡に伴うと考えるより、半数ずつの鉸具4点と考えれば、面繫部分だけは鉸具1点を伴うE類として考えることができる。ただし、出土状態からは断定し難く、轡2点に対して鉸具1点という出土数も取り扱いが難しく、鉸具1点のままでとすれば、どちらかの轡の面繫を装着するには、次のF類で示したような革帯を縛ることによって着脱と固定を可能にしたと考えざるを得ない。

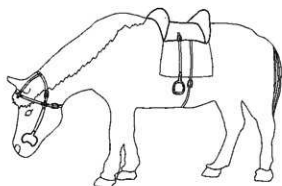
F類(Fig. 4)

轡1点に対して、辻金具3点を基本とする面繫のみの馬装である。辻金具の位置関係は、静岡県地蔵ケ谷1号墳の出土状態によって明らかで(Fig. 5)、「額革」中央に1点配する形態を探ると判断できる。ただし、残存状態にも左右されるが、鉸具をまったく伴わず、「額革」を縛って固定していたと考える。

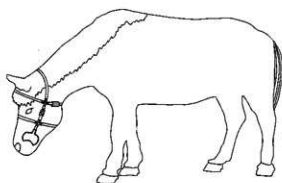
類例は静岡県雲座D1号墳・地蔵ケ谷1号墳が該当する。

上記の類例以外に、比較的出土状態の良好な資料から馬装を復元できるものとして、千葉県大作遺跡31号墳例〔(財)千葉県文化財セ1990〕がある。本例は、馬の骨が残存しており、出土状態から副葬品を収めた施設ではなく、馬の埋葬土壌と判断できる。残った馬具から馬装を復元すると、

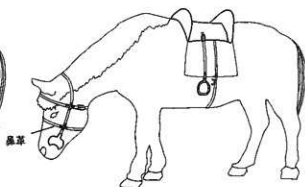
C-2



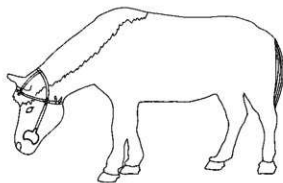
D



E



F



分類外



Fig. 4 鉄製楕円形鏡板付轡の馬装復元図(2)

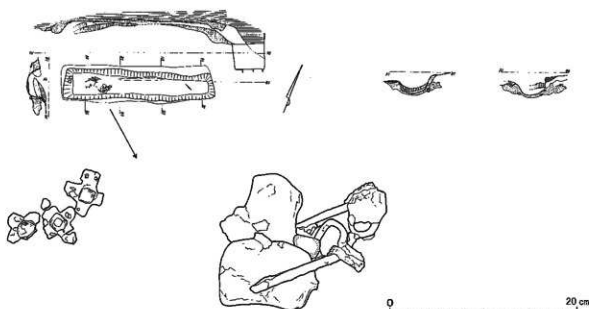


Fig.5 地藏ヶ谷1号墳・馬具出土状況

轡は1点出土しているものの、辻金具は一切出土しておらず、代わりに鞍金具が2点出土していることから鞍が存在していたことが明らかとなっている。鞍金具以外には鉸具3点が出土しており、出土位置から判断して胸繫に伴う革帯を鞍と着脱するための鉸具・鎧の高さ調節と着脱のための力革に装着する鉸具・腹帯に装着して鞍を着脱するための鉸具を想定した(Fig. 4)。報告の中でも復元案が提示されているが〔(財)千葉県文化財セ1990〕、筆者の視点とやや異なる箇所がある。

その他の資料は、出土状態が不明であったり、馬具そのものの残存状態が悪く、馬装復元には困難な状態のものが多く、今後の資料の増加を待たなければならない。しかし、京都府今林2号墳例や奈良県忍坂4号墳例にみるように、確実に轡しか出土していない例があり、こうしたものに有機質のどのような面繫が施されていたのかは、現段階では不明である。

c 馬装の特徴

遺物の残存状態や出土状態の良好な資料を中心に馬装の復元を試み、9種類に分類した。各類型は、(1)面繫を中心とする馬装(A-1・B-1・C-1・D・F類)と(2)面繫と尻繫を中心とする馬装(A-2・B-2・C-2・E類)に分けることができる。この二種が馬装の基本となっている。轡のみの出土資料については、金属製品を伴わない面繫の装着方法の可能性もあり、現段階では最低でも面繫を中心とした馬装と考えている。

辻金具の数はA類の2点を最小としB・C・F類の3点、D類の4点が最大である(ただし、福井県きよしの2号墳例が8点すべて鉄製楕円形鏡板付轡に伴うとすれば、本例が最大である〔花

谷1991・宮代1997))。辻金具の個数としては3点が最も多く、額革の中心に辻金具1点を置き、左右に残り2点を配するタイプが基本である。

面繫と尻繫を中心とする馬装では、雲珠は環状のものを使用している。革帯の実際の出土例がないため即断できないが、静岡県高尾向山3号墳例の鍔金具と方形金具のセットとなった留金具が2方向に「ハの字」状に配置され、杏葉が2点伴うことを基本とすれば、鞍から伸びる革帯は2条程度の単純構造であったと言える⁽¹⁾。杏葉が1点から3点までの多寡があるにせよ、いずれも前述の尻繫構造で装着できる。このため、鉄製楕円形鏡板付轡の尻繫の形態は、想定可能な範囲の資料からは、ほぼ同形態であると言える。

杏葉の形態は、西大塚古墳出土例によると鉄製地板に縁金具を合わせ、金銅板を同時に被せ鋲留する形態の剣菱形杏葉が3点出土している。愛野向山B12号墳例では鉄製地板そのままの状態の剣菱形杏葉が1点出土している。さらに、高尾向山3号墳例・小木原地下式横穴例・鶴崎天神台遺跡3号墳例では、環状雲珠とともに鈎手金具が検出されていることから、有機質による杏葉が想定できるが、形態は不明である。以上から、鉄製楕円形鏡板にともなう杏葉は、花谷氏が指摘するように〔花谷1991〕、剣菱形杏葉である。材質については縁金具と鋲留を行って金銅板を被せるものと、鉄地そのままの状態のもの、有機質のもの三種になると言える。

鞍そのものの出土例はないが、千葉県大作遺跡31号墳からは鞍座金具が2点出土しており、鞍の想定が可能である。これ以外には鞍の存在は明らかにできないが、鐙を出土している静岡県愛野向山B12号墳例・奈良県新沢千塚112号墳例・茨城県上野古墳例〔関城町1988〕が存在することから、こうした例に鞍の伴っていた可能性がある。また、馬装の分類を行った中のA-2類とB-2類では杏葉と雲珠を伴うことから、固定のために鞍が必要である。くわえて、出土した鉤金具から面繫に必要な鉤金具を除いた場合1点余ることになり、この1点について鞍を固定する腹帯の着脱用の鉤金具として考えることは可能であり、こうした面からも鞍の存在した可能性は高い。

4 まとめ

鉄製楕円形鏡板付轡は従来、現代的視点に立てば「装飾性に乏しい」馬具であるとの認識が漫然となされてきた。実際に石ノ形古墳において同じく出土した「フ」字形鏡板付轡が、金銅張の轡と辻金具を伴って出土していることから、金銅張と鉄地板の間には明らかな装飾的差違があることは否定できない。しかし、今回僅かな例から馬装の復元を行っていった中で、個々の馬具を観察すると、まったく加工が施されていない訳ではないことがわかる。つまり、分類で示したA-2類の中の静岡県高尾向山3号墳例では辻金具と、環状雲珠に伴う革帯を固定する留金具の表面が、いずれも金銅張である。また、同じ類型の埼玉県どうまん塚古墳例では、3点の剣菱形杏葉が金銅張である。こうした例は、B-2類の茨城県西大塚古墳例の杏葉やF類の静岡県地蔵ヶ谷1号墳例の辻金具が金銅張である点に見出せる。また、特殊な例としてC-1・2類の奈良県新沢千

塚312・112号墳例では鏡板と辻金具の表面を黒漆で覆っていたことが確認されており、こうした点も装飾の中に含めて考える必要がある。以上よりすれば、馬装の復元を行った中の「面繫と尻繫を中心とする馬装」の、特に尻繫に装飾を施したものが多く、鏡板そのものに加工を施しているものはC-1類における奈良県新沢千塚312号墳例の黒漆の塗装と、F類における静岡県雲座D1号墳例の鏡板縁部への列点紋だけである。

金銅張の馬具と鉄製の馬具を比較した尼子奈美枝氏は、「(中略)飾る”要素を持つ馬具の所有においては胸繫や尻繫を”飾る”杏葉や雲珠よりも、面繫を”飾る”ための金銅張の板状鏡板の所有の有無によって、格差を付けられる場合が多かったと考えられるのである。」「[尼子1997]と結論付けておられるが、先述来の鉄製楕円形鏡板付轡における装飾が尻繫に重点が置かれていることと対照的である。

静岡県袋井市域での事例を比較すれば、鉄製楕円形鏡板付轡の導入当初(5世紀後半)から、石ノ形古墳例のような面繫を中心として装飾性に欠ける系統と、愛野向山B12号墳例や高尾向山3号墳のような尻繫を伴いながら、金銅張を交え装飾意識を表した系統が混在していたと言える。しかし石ノ形古墳例では、先に述べたようにf字形鏡板付轡を伴うことで装飾性に欠けるとの視点は改める必要があり、くわえて、短甲・鏡・刀剣・玉類をはじめとした豊富な副葬品類は、愛野向山B12号墳例や高尾向山3号墳を遥かに凌ぐものである。

以上から、鉄製の鏡板と金銅張の杏葉や辻金具が混在するという馬装そのものが、鉄製楕円形鏡板付轡をもつ古墳の被葬者像の一端を表していると考ええる。つまり、坂本氏の分析結果などにも表れているように[坂本1997]、中小の円墳から出土する例が多く、いわゆる大形古墳や首長墓的な要素の濃い古墳からは出土する傾向が少ないということである。しかし、前述の傾向を決して劣性として捉えるのではなく、むしろ古墳群内や小地域内での中心となるような古墳から出土しているという点にこそ被葬者の立場を見出せるのである。

5 おわりに

石ノ形古墳の調査によって明らかとなった馬具の出土状態に端を発して、馬装の復元を試みた。当初述べたように、見えない遺物の認定が、机上での数合わせや推測に終わった感も決して否めない。しかし、復元を行って痛感することは、あまりにも各報告での馬具出土状態の情報量が少ないことである。「辻金具は裏返っていたのか、鉸具との出土位置関係はどうか…」等々、詳細な図と報告があればより馬装の細かな復元と検証に役立つはずである。残念ながら、こうした単純な要求に答えることのできない報告が多い。

今回の復元案は、特定の形態の轡に限って論を進めてきたことと、先のような情報不足から必ずしも出土状態を反映したものにはなっていない。自らの反省も含め、ひとつの捉え方であるとご理解いただき、今後良好な出土状態の観察資料を重ねていくことによって、修正を加えていき

たいと考えている。大方のご叱正を仰ぐものである。

小稿をまとめるにあたって以下の方々より資料の提供を受けるとともに、有益なるご教示を賜った。記して感謝申し上げます(敬称略・順不同)。

飯島哲也 大谷宏治 川江秀孝 北山峰生 木戸雅寿 斎藤彰裕 斎野裕彦 坂本美夫 渋谷恵美子 中村 弘 中野和浩 永井義博 永井正浩 松井一明 松永博明 宮代栄一 富田尚夫 廣岡孝信 米田文孝 中村健二 三原一将 鷹野一太郎 佐伯 治 羽咋市教育委員会

【註】

1 杏葉を伴う尻繫構造については、後藤守一氏がまとめており、氏の分類に従えば「單條式」の「第一ないし第二様式」に該当する。後藤守一 1942 「上古時代の杏葉に就いて」『日本古代文化研究』所収

【引用・参照文献】

- | | | | |
|-----------|------|---|--------------|
| 尼子奈美枝 | 1997 | 『金の轡と鉄の轡』『創立三十周年記念誌』 | 元興寺文化財研究所 |
| 今尾文昭 | 1984 | 『古墳祭祀の画一性と非画一性—前期古墳の副葬品配列から考える—』『橿原考古学研究所論集』第六 | 橿原考古学研究所編 |
| 小野山節 | 1992 | 『古墳時代の馬具』『日本馬具大鑑—』古代上 | 日本馬具大鑑編集委員会編 |
| 鹿野吉則 | 1987 | 『大和における馬具の様相—鉄製楕円形鏡板付轡を中心に—』『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ | 森浩一編 |
| 群馬県教育委員会 | 1980 | 『塚廻り古墳群』 | 群馬県教育委員会 |
| 坂本美夫 | 1985 | 『馬具』考古学ライブラリー34 | ニュー・サイエンス社 |
| 坂本美夫 | 1997 | 『鉄製楕円形鏡板付轡の分布とその特性』『立正史学』第81号 | 立正史学会 |
| 関川尚功・ト部行弘 | 1988 | 『高取町与楽古墳群』『奈良県文化財調査報告書』第56集 | 奈良県立橿原考古学研究所 |
| 花谷浩 | 1991 | 『馬具—日本出土鉄製鏡板付轡に関する覚え書き』『川上・丸井古墳発掘調査報告書』 | 長尾町教育委員会 |
| 宮代栄一 | 1993 | 『5・6世紀における馬具の「セット」について—「字形鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・剣菱形杏葉を中心に—』『九州考古学』第68号 | 九州考古学会 |
| 宮代栄一 | 1997 | 『古墳時代の面繫構造の復元—X字脚辻金具はどこにつけられたか—』『HOMINIDS』Vol.1 | CRA |

(しらさわ たかし 袋井市教育委員会)

表 1	鐵製精円形鏡板付嚮出土土遺跡集成
-----	------------------

No	遺跡名	縣名	府県	市町村	文獻
1	小水原地下式横穴	宮崎県	えびの市	宮崎県教育委員会 1973「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書」第1巻	
2	鹿座5号地下式横穴	宮崎県	えびの市	宮崎県教育委員会 1973「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書」第1巻	
3	久見通B-1地区SK107	宮崎県	えびの市	宮崎県教育委員会 1967「宮崎県史・資料編・考古2」第12輯	
4	大枝22号地下式横穴	宮崎県	野尻町	えびの市教育委員会 1996「えびの市埋蔵文化財調査報告書」第16集	
5	平清水横穴	宮崎県	日之影町	宮崎県教育委員会 1974「大枝遺跡(1)、瀬戸ノ口地区特殊地帯保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」第16集	
6	築城地上式2号横穴	宮崎県	都城	宮崎県 1993「宮崎県史・資料編・考古2」	
7	築城地上式3号横穴	宮崎県	都城	宮崎県 1993「宮崎県史・資料編・考古2」	
8	築城地上式3号横穴	宮崎県	三光村	宮崎県 1993「宮崎県史・資料編・考古2」	
9	上ノ原35号横穴墓	大分県	日出市	大分県教育委員会 1992「上ノ原横穴墓群」第1巻	
10	法皇寺4号墳	大分県	日向市	日向市教育委員会 1959「大分県志願寺古墳」	
11	稲山岡横穴3号	熊本県	城南町	未詳史料	
12	知川26号墳	熊本県	熊本市	熊本県教育委員会 1975「塚原」「熊本県文化財調査報告書」第16集	
13	鈴蘭3号墳	福岡県	八女市	八女古窯跡調査団 1970「昔の名窯跡群」	
14	飯間山古墳	福岡県	糟屋郡	福岡県教育委員会 1974「佐谷・飯間山・古墳調査報告」	
15	名木野7号墳	福岡県	—	(宮代 1993)において報告されているが、所在確認できず。	
16	名木野11号墳	福岡県	—	(宮代 1993)において報告されているが、所在確認できず。	
17	開地池22号墳	鳥取県	島根市	鳥取県 1972「鳥取県史」第1巻「原始古代」	
18	高松台白山古墳	愛媛県	松山市	松山市教育委員会 1983「研究本白山古墳」「松山市文化財調査報告書」第16集	
19	治平台3号墳	愛媛県	今治市	今治市教育委員会 1974「唐子右邊跡群」今治市立石井分館「古墳(墳墓)」研究報告	
20	治平台5号墳	愛媛県	今治市	今治市教育委員会 1974「唐子右邊跡群」今治市立石井分館「古墳(墳墓)」研究報告	
21	立石105号墳	兵衛県	豊田市	兵衛県教育委員会 1979「豊田市立石井分館埋蔵文化財調査報告書」兵衛県埋蔵文化財調査係報「第4集」	
22	大森2号墳	兵庫県	丹波町	(内)京都府埋蔵文化財調査研究所 1981「多紀管内記・丹波町文化財調査報告書」第2集	
23	太極2号墳第1主体部	京都府	京都市	京都府埋蔵文化財調査研究所 1996「京都府埋蔵文化財調査係報」第68冊	
24	駒込土管古墳	東京都	京都市	日本大学人類学研究所社会科学研究センター 1991「第9回小さな歴史を一緒に書く」第2冊	
25	大目黒古墳群2号墳	東京都	練馬区	(京)都府埋蔵文化財調査研究所センター 1991「第9回小さな歴史を一緒に書く」第9集	
26	新大塚12号墳	奈良県	橿原市	奈良県立橿原考古字研究所 1981「新大塚十基古墳群」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第39冊	
27	新大塚13号墳	奈良県	橿原市	奈良県立橿原考古字研究所 1981「新大塚十基古墳群」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第39冊	
28	大塚4号墳	奈良県	桜井市	奈良県立橿原考古字研究所 1978「桜井市外堀山古墳群(仮称古墳)」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第34冊	
29	巨勢山古墳群境合交錯8号墳	奈良県	新庄町	奈良県教育委員会 1974「大和国・磐山古墳群」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第34冊	
30	吉野山古墳群群H一16号墳	奈良県	新庄町	新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古字研究所 1983「寺口忍坂古墳群」新庄町文化財調査報告書第1冊	
31	寺口忍坂古墳群群H一16号墳	奈良県	新庄町	新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古字研究所 1983「寺口忍坂古墳群」新庄町文化財調査報告書第1冊	
32	寺口忍坂古墳群群D-27号墳	奈良県	葛城市	新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古字研究所 1983「寺口忍坂古墳群」新庄町文化財調査報告書第1冊	
33	衣笠5号墳	滋賀県	栗東市	滋賀県埋蔵文化財調査事務所 1986「当麻町・衣笠古墳群発掘調査報告書」第1巻	
34	衣笠5号墳	滋賀県	栗東市	滋賀県埋蔵文化財調査事務所 1986「当麻町・衣笠古墳群発掘調査報告書」第1巻	
35	水南寺土墳	滋賀県	大津市	滋賀県埋蔵文化財調査事務所 1986「当麻町・衣笠古墳群発掘調査報告書」第1巻	
36	寺内18号墳	和歌山県	和歌山市	和歌山県史跡調査委員会 1994「江戸と和歌山の文化財」刊行40周年記念展	
37	さよしの2号墳	福井県	羽咋市	米沢雄雄 1967「若狭千歳」関西大学文学部考古学専攻第2巻	
38	二子山3号墳	福井県	越前市	三ツ方町教育委員会 1975「若狭さよしの古墳群」三ツ方町文化財調査報告書「第1巻」	
39	天孫神社1号墳	岐阜県	各務原市	福井県立若狭総合史民俗資料館 1991「特別展 運動する若狭の王者たち―三ツ方後円墳の時代―」	
40	天皇神社古墳(龍山北4号墳)	岐阜県	各務原市	各務原市 1983「各務原市史」考古・民族関係	
41	高橋山古墳	岐阜県	美濃市	各務原市 1983「各務原市史」考古・民族関係	
42	高橋山古墳	岐阜県	美濃市	各務原市 1983「各務原市史」考古・民族関係	

6 石ノ形古墳出土の円筒埴輪

—円筒埴輪の位置付けをめぐって—

十河 良和

1 はじめに

本調査で出土した円筒埴輪は、第Ⅴ章でその概要を記したが、墳丘裾部と墳頂部の出土地点ごとに個別で報告を行ったため、まとまりのある報告とは言い難いものとなってしまった。そこで、本稿では石ノ形古墳の円筒埴輪が静岡県西部の遠江地域、特に磐田原台地周辺で占める位置について述べる前に、今一度、石ノ形古墳の円筒埴輪についてまとめてみたい。その後、前記の地域における円筒埴輪の位置付けを確認するための検討を行いたい。

また、第Ⅷ章で説明されたとおり、墳頂部の円筒埴輪列は、墳丘の盛り土と墓墳の構築の一連の作業に伴って樹立された可能性の高いことが明らかになっている。特に墓墳の構築に伴うという点は、被葬者の埋葬と円筒埴輪の樹立のそれぞれの時期が非常に近接していたことが指摘できることから、古墳の築造・被葬者の埋葬の時期を、円筒埴輪の型式がもっとも端的に表している可能性が高いということになる。円筒埴輪の年代を考察することは、古墳築造時期についても大きな示唆を与えることになるものと考ええる。

2 石ノ形古墳出土の円筒埴輪

石ノ形古墳では周溝確認トレンチAと墳頂部から円筒埴輪が出土したが、周溝確認トレンチA出土資料は原位置から遊離していたうえ、墳頂部出土資料は底部のみが残存するという、非常に遺存状況の悪いものであった。また完形に復元できる個体も出土しなかった。そのため、円筒埴輪を構成する諸要素から埴輪の全容を復元していく作業を行わなければならない。各部の要素の特徴は、あくまでも各部の性格を示すものであり、部分的な特徴だけをもって石ノ形古墳の円筒埴輪の性格を代表させることはできないわけであるが、細心の注意をもって石ノ形古墳の円筒埴輪の全容を復元することに努めたい。

本稿では、周溝確認トレンチAと墳頂部から出土した円筒埴輪について、まとめて整理を行いながら、埴輪の性格を特徴づける点、特に器形の復元と外面調整を中心として検討を加えていく。

器形・法量 器形の全容は、前述のとおり底部から口縁部までが揃う資料が出土しなかったことから、不明といわざるを得ない。そのなかで、底部から1段目という限定された資料から、ほぼ垂直方向を指向して立ち上がる個体(55・56・58)と、上方へ向かって緩やかに広がる個体(28・59・60)との2種類の存在が窺える。全体の器形に想像を及ぼせば、前者の底部を持つ個体はほぼ

垂直方向を指向したものと考えられ、後者の底部を持つ個体は極端なラッパ形にはならない緩やかな逆台形を呈する器形であったと考えられる。両者の個体数の比率については明らかでない。口縁部の形状は、最上段突帯の上部から緩く外反する。口縁端部は資料数が僅少ではあるが、突帯を貼り付けたり折り返すなどの加飾を行わない単純なものである。

法量では、底部径・突帯径について判明する資料が得られた。ただし、その多くが反転復元による数値であるため、成形時や焼成時に歪みが生じていることを念頭におけば、若干の誤差を含むものとしなければならないが、それでも突帯径で20cm前後と27cm前後の2グループに分類することができる。しかしこの差が何を意味するかということになると不明といわざるを得ない。可能性として、樹立位置の違いによる円筒植輪に与えられた機能面における違い(墳頂部に大型品を用いる、正面観を意識してその方向に大型品を用いるといった例¹⁾等。)や、いずれかが朝顔形植輪の頸部以下に相当することも考えられるが、現状では推測の域を出ない。

突帯間隔は2条分の突帯を有する資料が出土しなかったことから、不明といわざるを得ない。ただし前述したように21から約13cm程度の突帯間隔であったことが窺えるが、これがすべての個体に適用できるかどうかは明らかでない。また、接地面から1段目の突帯までの高さ(底部高)が28から19.0cmという数値が得られるが、これは比較的に高いと捉えられるものである。28以外には底部高が判明する資料が存在しないが、墳頂部出土のすべての個体には突帯の貼り付け痕が認められず、底部高が比較的に高いものと考えられることから、おおむね28の19.0cmという数値に近いものであったことが推測できる。

器高・器形については、詳細を明らかにすることが難しい。それは、前述のとおり僅かな遺存例からおおよその突帯間隔は判明するものの、何条の突帯が備わるかについて検討できる資料が皆無であるからである。底部径が20cm程度と小型品の本例は、それほど多数の段構成をとるとは考えられないが、可能性として2条突帯3段構成、あるいは3条突帯4段構成に復元できるものとしてよいであろう。この場合、17より口縁部の高さが約10.5cm、21より突帯間隔が約13cm程度、28より底部高が19.0cmという数値が得られたことから、これらの数値を足すことによって、器高は2条突帯3段構成であれば約43cm程度、3条突帯4段構成であれば約56cm程度に復元できる(Fig. 1)。どちらの構成の可能性がより高いかという問題については、底部径が小型であるという理由とともに、後述するように京見塚古墳と同様の2条突帯3段構成である可能性が高いものと考えている。

突帯 突帯は、おおむね断面形が台形を呈し、器壁より約1cm程度が突出する、比較的に突出度のある感のものである。ただし、断面形がM字形を呈するものや少量ながら扁平なものも含まれる。また、出土状況から窺えば、57のように同一個体内でも突帯の形状にバリエーションのあるものが存在する。これが、同一製作者による製作時の何らかの都合によって生じた違いなのか、あるいは別工人の製作によるものなのかは明らかでない。

次に、古墳時代中期という時期においては、突帯の貼り付けに際し、突帯の設定技法として器

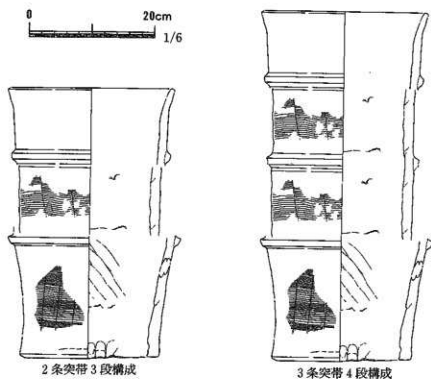


Fig. 1 石ノ形古墳出土円筒埴輪復元図

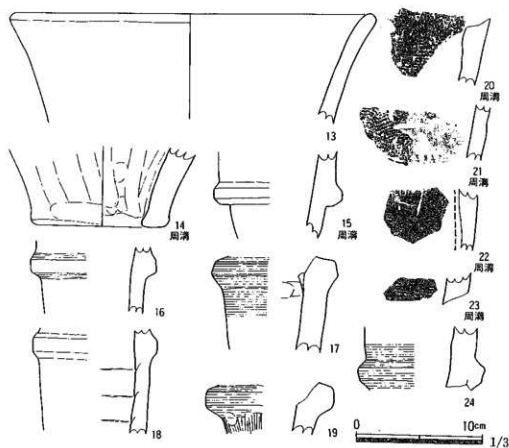


Fig. 2 平成2年度石ノ形古墳出土円筒埴輪(松井1992)

壁側に工具による沈線を巡らし、突帯の上下の位置を定める例が見受けられる(辻川1993)。しかし、今回の出土品のなかには、このような突帯設定技法は認められなかった。

外面調整 外面調整は摩耗が進行しているうえ、器壁が剝離するものが多かったことから、検討の俎上に上げることができたのは、小面積の破片となった資料である。それによれば、1次調整は、通有であればタテハケ調整を行うことが基本であるが、本調査の出土品には1次調整に明確にタテハケ調整を行ったものは認められず、ナデ調整を多用していることが明らかになった。特に墳頂部出土の底部では、すべて1次調整にナデ調整を行っていることから、それが上部の胴部・口縁部でも施されていた可能性が高いと考えている。なお、60では1次調整として横方向の板ナデを施しているが、器面に木目が残るものではなく、ハケ工具とは明らかに区別できる点でも、タテハケ調整を選択しない面が窺える。いずれにしても、工具による明確な1次調整を欠くという点で、特徴的な成形・調製方法である。ただし、平成2年度の墳丘南側における周溝の調査報告では、1次調整としてタテハケ調整を行うものが1点のみではあるが、図示されている(Fig. 2-19)(松井1992)。これらは製作工人の違いとして捉えることも可能としておきたい。

2次調整には、多くの破片でヨコハケ調整を認めることができる。また、ハケ工具の静止痕が顕著に現れることから、それがB種ヨコハケ調整であることも明らかである。B種ヨコハケ調整は、近年の円筒埴輪の編年研究に大きな進展をもたらした要素である。報告編で簡単に触れたが、ここでもう一度、その詳細について検討してみたい。

古市古墳群におけるB種ヨコハケの細分を行われた一瀬和夫氏の検討(一瀬1992a)によれば、B種ヨコハケは以下の4種類に分類される。

- B a 種ヨコハケ：ヨコハケ工具が2度以上器壁から離れ、1度離れた工具が同じ位置からヨコハケを再開する断続的なもの。その際に高い確率で静止痕が表れるもの。
- B b 種ヨコハケ：突帯間を突帯間隔よりも幅の狭いヨコハケ工具が上下に重なって2周以上施されるもの。
- B c 種ヨコハケ：突帯間隔と同一幅の工具で1周の動作によりヨコハケ調整を施すもので、静止痕が直立するもの。静止痕の間隔が狭いものと広いものがある。
- B d 種ヨコハケ：突帯間隔よりも幅の広いヨコハケ工具で1周の動作によりヨコハケ調整を施すもので、静止痕が規則的に斜めに傾くもの。

時間的な変遷は、B a 種ヨコハケからB d 種ヨコハケに移行していくものとされ、B種ヨコハケの変遷と2次調整の欠落の頻度で埴輪の編年を組み立てられた。

当埴輪のB種ヨコハケ調整は、突帯間が完存する資料が出土しなかったことから、厳密に一瀬氏の分類に当てはめることは不可能であったが、資料を検討することによって対応させ得る可能性を探りたい。破片から窺える要素として、①：ハケ工具の静止痕が直立するものが目立つこと、②：ハケ工具の移動が突帯間で2周するものがあること、③：②とは対照的に、突帯間でハケ工具の移動が1周で終わるものがあること、を第V章(p.66)で明らかにした。これらの要素か

ら、①の静止痕が直立するという点と②のハケ工具が突帯間を2周するうえ、静止痕が明瞭な点から、B b種ヨコハケに相当するものと考えることができる。また、①と③のハケ工具が突帯間を1周しか巡らないという点からB c種ヨコハケに相当するものと考えられることもできる。しかし、それらを直接当てはめるには躊躇する点が多い。それは、まず①と②からB b種ヨコハケとするには、摩耗が進行していることで明確な資料が認められないことである。また、①と③からB c種ヨコハケとするには、ハケ工具が突帯間を完全に満たす幅ではないことである。21で判明するハケ工具の幅は約6 cm強であり、それよりも幅の広い突帯間を1周の動作でカバーすることは不可能であることから、明らかにB c種ヨコハケが意図した1周の動作で突帯間をカバーするという目的からはずれている。B c種ヨコハケは、外面調整としては、突帯間隔と器高の関係に連動した最も効率的な調整技法であると考えられる。それは、ハケ工具が突帯間隔に規制され、突帯間隔が何段になるかによって器高が設定されるからである。当埴輪には、突帯間隔を規定するもう一つの技法である突帯間隔設定技法がまったく認められず、この点でも製作者がB c種ヨコハケ技法を意識していなかった証左になると考える。このように有機的にハケ工具・突帯間隔・器高が関連づけられることによってB c種ヨコハケが成立している以上、表面的に似た様相を呈する当埴輪を一瀬分類のB c種ヨコハケに当てはめることはできない。

このように、当埴輪は一瀬氏によるB種ヨコハケ技法の分類に直接当てはめることが不可能であったわけであるが、工具幅が突帯間隔より狭く器壁を完全にカバー仕切れていない点や工具の移動が上下に波打つようなラフなものである点で、畿内からの影響を直接受けていないか、伝播した技法が退化していった状況が推測できる。ただし、静止痕が直立し間隔が狭い点は、当時の畿内の影響を受けているとも考えられるのであるが、これらの点については現時点で明確に位置づけられない。外面調整の示す時間的な位置付けについては、周辺に存在するB種ヨコハケ技法を有する埴輪を検討する際にさらに言及したい。

内面調整 内面調整は、摩耗が進行している個体が特に周溝確認トレンチA出土のもので多く、観察できる資料が少量であった。墳頂部出土の底部はすべてナデ調整を用いており、ハケ調整を施すものは出土していない。この点でも成形後の基本的な調整にハケ工具を用いないという外面調整の項でみたことと同様の性格が指摘できる。これら底部に行われたナデ調整は、非常に明瞭な指の単位を残す丁寧なものと、器壁が荒れたままの粗雑な仕上りのものがある。また、同一個体内においても、粘土紐の接合痕の上下で仕上りの異なるものがあり、内面の平滑化にあまり注意が傾けられないという状況も窺える。

焼成・胎土 焼成は、黒斑が表れるものが皆無であることから窯焼成によるものであるが、須恵質焼成されるものは見受けられず、黄褐色系の硬質な焼き上がりを目指したものといえる。ただし、摩耗が進行し、軟質化した破片が多くを占めている。

胎土に利用される粘土は、緻密で鉾物の含有量が非常に少ないものが用いられている。同じ窯焼成の土器でも、須恵器は鉾物の含有量が少ないものであるが、埴輪の場合は、鉾物を意図的に

含んだものを使用する例が多く見られる。ところが、当古墳の埴輪は、肉眼で判別できない程、鉱物が少なく、緻密で均質な粘土を用いていることが特徴といえよう。

その他 透かし孔については、その形状・位置が判明する資料がまったく出土しなかった。透かし孔が穿孔されていなかったという可能性は、常識として考えられず、窯焼成導入後という時期を勘案すれば、円形に穿孔されていたものと考ええる。

樹立位置 円筒埴輪は墳頂部において7個体が原位置を保って出土した。その出土状況は第三章・Fig.18に示されるとおり、間隔を空けながらも円弧を描くように樹立される。57と58の間で大きく間隔を空けるが、本来はその部分にも埴輪が樹立されていたものと考ええる。特に61周辺は底部の遺存状況が悪いことから、大きく削平を被ったことは疑いない。そのため、隣接して樹立していたものは、痕跡を留めないうちに削平されたものと考ええる。一方、墳丘周辺にも広く調査の範囲は及んでいるが、円筒埴輪の出土は主に周溝確認トレンチA周辺に偏る結果となっている。調査担当者は、この状況を本来の埴輪の樹立位置が周溝確認トレンチA周辺のみに行われたのではないかと推測している。中期古墳であれば、墳丘のテラスや外堤に沿って墳丘を囲うように円筒埴輪を巡らせることが一般的であるが、この推測が成立する場合は墳丘を囲う状態を呈さず、墳丘の一部のみに円筒埴輪を樹立していたことになる。いずれにしても、原位置を遊離した出土状況であることから断定するには至らないが、仮に墳丘の一部分のみの樹立であったならば、埴輪樹立の目的が大きく後退したものと捉えなければならない。横穴式石室を採用した後期古墳であれば、石室入り口付近のみに立て並べられることもあるが、中期古墳である石ノ形古墳の場合は、周溝確認トレンチA周辺に造り出しの存在も考慮する必要があると考ええる。

以上、石ノ形古墳出土の円筒埴輪を検討した結果、川西宏幸氏による埴輪編年(川西1978)に当てはめれば、第V章で記したとおりⅣ期に位置づけられることになる。ただし、前述したようにⅣ期の時期幅が広いことから、それだけでは詳細な位置付けは論じられない。そこで、いったん周辺地域に存在する円筒埴輪を概観したうえで、再び石ノ形古墳例の検討を行いたい。

3 静岡県西部における埴輪生産

袋井市域を含む静岡県西部、遠江地域は、「淡輪技法」という特徴的な技法(川西1977)を導入した円筒埴輪が存在することから、埴輪生産の地域的な動向を探る研究が進展している地域である。遠江における埴輪研究は鈴木敏則氏、赤塚次郎氏、設楽博己氏らによって行われているが、石ノ形古墳の円筒埴輪が、遠江地域にあってどのような位置を占めるのか、先学の研究を参考として検討する。

天竜川流域の古墳から出土する円筒埴輪に、大阪府の淡輪地域の円筒埴輪に採用される「淡輪技法」の特徴のうち、底端部外面に溝状の段を巡らせる技法を採用するものがあることに注目さ

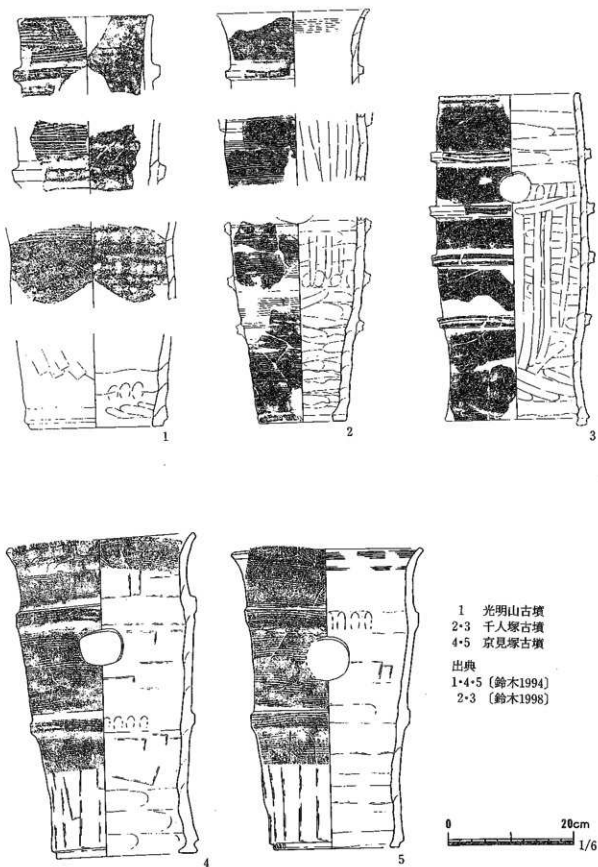


Fig. 3 笠田型埴輪実測図

れたのは川西宏幸氏である。川西氏は、この段を自重で歪んだ埴輪の底端部を外側に折り返したために生じた痕跡であると説明され、静岡県で出土する「淡輪技法」を用いた円筒埴輪は、「前略一遠江の第Ⅴ期の円筒埴輪については、淡輪からの影響の元に成立したとみて誤りなからう。淡輪の第Ⅴ期の円筒埴輪の底部調整が独特の技法であり、他地域において容易に自生するものでないことは、この推測を容易にする。一後略」とされた(川西1978)。しかし、この底部の段を、底部の直径を揃えるためのツルの痕跡であるとの確に説明されたのは鈴木敏則氏である(鈴木1982)。鈴木氏はその後、遠江地域の淡輪技法を用いる円筒埴輪について検討を加えられ(鈴木1990)、遠江の淡輪技法を有する円筒埴輪は遠江で自生したものではなく、淡輪地方の埴輪製作工人と直接に接触した遠江の工人の製作によるものであり、淡輪の主流の工人が遠江に移動して生産に携わったものではないと結論づけられた。鈴木氏は、この淡輪技法を用いる円筒埴輪を外面調整の違いにより2種類に分類され、1次調整タテ板ナデ後に2次調整C種ヨコハケを行うものをⅠ類、1次調整タテハケ後に2次調整C種ヨコハケを行うものをⅡ類とされた。また、Ⅰ類の円筒埴輪には浜松市千人塚古墳(鈴木1998)、天竜市光明山古墳(天竜市1981)、磐田市京見塚古墳(山村他1982)例をあげられ(Fig. 3)、Ⅰ類の下限として京見塚古墳例をTK208型式(田辺1966)期に位置づけられた。(その後、鈴木氏は(鈴木1994)文献で、Ⅰ・Ⅱ類をまとめてⅤA類と系統づけられ、それに「淡輪系遠江型埴輪」の名称を与えられた。)

一方、赤塚次郎氏は東海地域の円筒埴輪の分類作業(赤塚1992)に際して、外面調整にB種ヨコハケを採用する円筒埴輪を「B種ヨコハケ系埴輪」、底部に何らかの設定技法を持ち、内・外面調整にヨコ方向の動作を主に行う円筒埴輪を「須恵器系埴輪」と分類された。さらに「須恵器系埴輪」のうち、底部に淡輪技法を採用し、粗いヨコハケ調整を用いて短い最上段が外反する一群(H類)を「磐田型埴輪」と呼称された。これは、分類の前提こそ異なるものの前述の鈴木氏の分類によるⅠ類に相当する。また、遠江における淡輪技法を採用する円筒埴輪の発生については、「淡輪、あるいは同様の技法を採用する伊勢北部からの単一的な伝播ではなく、須恵器という新しい技術に触発されて登場する、全国的に起こり得る共鳴現象」とされる見解を発表された。なお、「磐田型埴輪」の存続は短時間であったとされており、その後は「須恵器系埴輪」K類が替わって興隆するとされる。K類は鈴木氏の分類によるⅡ類に相当する。

このように赤塚氏が分類されたなかで、石ノ形古墳出土埴輪が含まれると考えられるのは、「B種ヨコハケ系埴輪」である。次に、「B種ヨコハケ系埴輪」のなかで、石ノ形古墳の円筒埴輪が占める位置について考えるため、鈴木敏則氏、設楽博己氏の研究を参考としたい。

鈴木敏則氏は、静岡県西部における円筒埴輪の編年作業を行われた(鈴木1994)。鈴木氏は川西宏幸氏の円筒埴輪編年を基準として6世紀代の地域性を考慮されたうえで、円筒埴輪をⅡ群からⅤ群の4群に分類され、それぞれの前後関係を整理した編年表を提示された。問題となるB種ヨコハケを採用する一群は川西編年のⅣ期と同様な特徴を持つものとしてⅣ群と位置づけられ、当該期の埴輪を樹立する古墳として堂山古墳(磐田市教委1995)、堂山2号墳、明ヶ島10号墳、馬坂

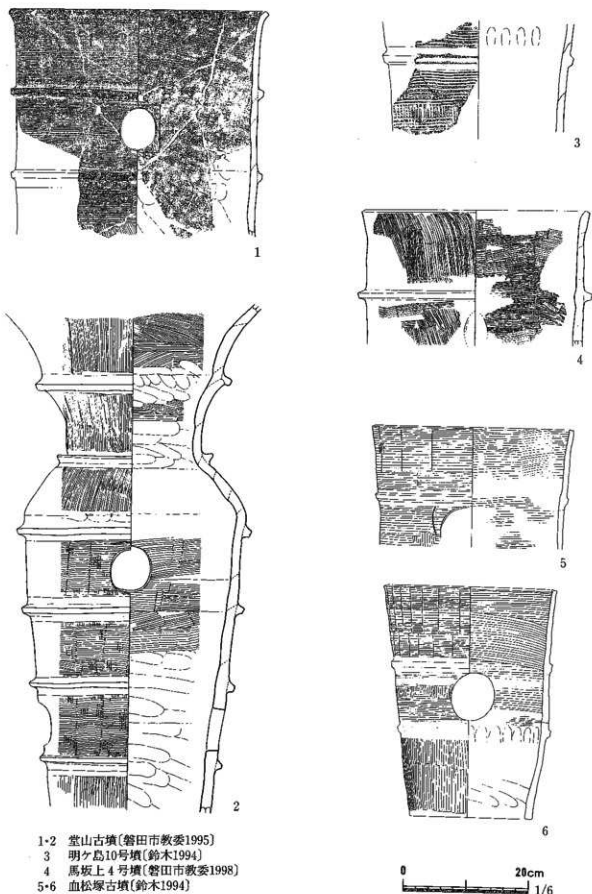


Fig. 4 B種ヨコハケ系埴輪実測図

上6号墳、血松塚古墳をあげられた(Fig. 4)。

堂山古墳出土埴輪は、B種ヨコハケを主体的に採用し窯焼成を導入した円筒埴輪として遠江最初の古墳と位置づけられる。鈴木敏則氏は堂山古墳例を須恵器編年のTK73型式を降らないものとされ、Ⅳ群の最初期に位置づけられるものとされた。

堂山古墳例については、鈴木氏の検討の後に刊行された調査報告書のなかで、設楽博己氏によって詳細に論じられている〔設楽1995〕。それによると、堂山古墳の円筒埴輪に用いられたB種ヨコハケ調整は一瀬和夫氏による外面調整の細分にあてはめれば、Ba種ヨコハケ、Bb種ヨコハケに該当するものであり、古市古墳群で同様の様相を持つ例は墓山古墳、菅田御廟山古墳中堤樹立の埴輪で、須恵器編年ではTK73～TK216型式に併行するものであるとされた。一瀬氏は最近の論考〔一瀬1998〕で典型的なBb種ヨコハケを採用する菅田御廟山古墳を4期古相としてTK216型式に位置づけられていることから、鈴木氏が述べられた「Ⅳ群の開始期はTK73型式を降らない」という意見より、TK73～216型式と考えられた設楽氏の意見を採用する方が妥当となろう。ただし、時期を厳密に特定するのであれば、より新しい様相を見せるBb種ヨコハケが一定量を占める点から、TK216型式期に求めることに妥当性があるものと考えられる⁽²⁾。

さらに設楽氏は、技法的な問題として埴輪の製作技術の優劣から堂山古墳出土埴輪をⅠ群とⅡ群に分類され、それを工人集団、メーカーの違いとしてとらえられ、Ⅰ群を外来(畿内)系の高度な技術によったもの、Ⅱ群が在地の低劣な技術工人集団によったものとされた。また、このⅡ群は、赤塚氏が提唱された「磐田型埴輪」の系列にのる在地的な埴輪の先駆的なものと位置づけられた。

鈴木氏は、堂山古墳の陪塚と考えられる堂山2号墳と磐田市明ヶ島10号墳〔中島1992〕から同様の円筒埴輪が出土していることから、両者は堂山古墳に併行するものとされ、これらに後続するB種ヨコハケを採用する埴輪に、豊岡村血松塚古墳、磐田市馬坂上6号墳をあげられた。しかし、血松塚古墳〔羽仁生1988〕では口縁部にのみB種ヨコハケを施すだけで、胴部にはC種ヨコハケを採用しており、「須恵器系埴輪」の影響が窺えるものである。また、馬坂上6号墳例は、その後刊行された報告書〔磐田市教委1998〕によれば、B種ヨコハケが用いられるのは1点だけであり、それも部分的なものであることから、明確な「B種ヨコハケ系埴輪」とは位置づけられないものとなった。このように、堂山古墳の築造以降、B種ヨコハケの採用は拡大することなく極めて低調な影響しか与えておらず、磐田原台地周辺における埴輪生産は鈴木分類によるⅠ類・Ⅱ類、赤塚分類による「須恵器系円筒埴輪」K類、及びヨコハケ技法を用いない「タテハケ系埴輪」〔赤塚1992〕がその主流を占めていくことが窺える。

このような状況のもと、唯一と言ってよい存在で石ノ形古墳の築造に伴ってB種ヨコハケ技法を採用した埴輪が生産された。

4 石ノ形古墳出土円筒埴輪の位置付け

石ノ形古墳出土埴輪は、外面調整にB種ヨコハケが用いられることから、赤塚次郎氏による「B種ヨコハケ系埴輪」に分類されることが容易に推測できるわけであるが、では、磐田原台地周辺に集中して分布する「須恵器系埴輪」・「磐田型埴輪」の要素はまったく含まれていないのだろうか。「磐田型埴輪」の主要な特徴は、底部の設定技法と粗いハケメを伴うC種ヨコハケ技法、幅広の突帯などがあげられるが、その他に高い底部高、短く外反する口縁、外面1次調整に板ナデ調整を用いることも注目される。特に埴輪の外見の要素としては最も重要な器形のうち、京見塚古墳例では3段ある突帯間隔が上から狭・中・広と下段へいく程、広がっていることは注目できる。翻って石ノ形古墳の円筒埴輪の器形に注目すれば、完存する個体はないものの、2条突帯3段構成であれば、京見塚古墳と同様に上から狭・中・広という構成を取り、短い口縁部が緩く外反するものである。また、石ノ形古墳例が外面1次調整に普遍的に用いられるタテハケ調整を採用せず、ナデ、あるいは板ナデ調整を採用することは、1次調整にタテハケを採用しない「磐田型埴輪」と似た様相であることがわかる⁹⁾。そこで、「磐田型埴輪」を構成する要素のうち、石ノ形古墳例に採用されているものといえないものを整理しておく。

採用されないもの：底部設定技法・粗いハケメを伴うC種ヨコハケ・幅広の突帯

採用されるもの：突帯間隔が上から狭・中・広1次調整にハケを用いず、タテ板ナデ調整

上記のように採用されないものは、「須恵器系埴輪」を特徴づける要素が中心であり、須恵器製作工人の関与を示唆する技法と考えられるが、それに影響されない要素のみが石ノ形古墳例に関連するものと考えられる。石ノ形古墳に採用されたB種ヨコハケは埴輪製作に限定された技法であるため、本来の埴輪製作工人の主体的な関与を考えることができるが、彼らは何らかの関係を京見塚古墳の埴輪製作工人と結んでおり、須恵器技法の影響を受けない要素だけを石ノ形古墳の埴輪に採用したと推測することも可能である。さらに、京見塚古墳、石ノ形古墳でみられる突帯間隔が不均一な円筒埴輪は、周辺では類例がみられないことから、お互いに何らかの関連を持つ可能性が、消極的ではあるが推測できる。

一方、「磐田型埴輪」に分類される千人塚古墳例は底部高こそ高いものの胴部・口縁部の突帯間隔が等間隔を指向しており、京見塚古墳とは異なった器形を呈しているが、京見塚古墳と石ノ形古墳とが似た様相を示すのは、ともに天竜川東岸に位置するという地理的な影響によるものとも考えられる。従来、「磐田型埴輪」としてまとめられてきた三基の古墳から出土した円筒埴輪であるが、今後、詳細な検討が必要と考えられる。

石ノ形古墳の円筒埴輪の時期は、第Ⅴ章で述べたように川西編年のⅣ期後半に位置づけられるものと考えているが、ここで再び検討してみたい。石ノ形古墳のB種ヨコハケ技法は、堂山古墳で忠実に再現された畿内地域のB種ヨコハケ技法からは大きく退化したものと捉えるべきものであり、また、畿内の埴輪製作工人の直接の影響があったものとは考えられないほど、各所の製作

技法が退化傾向を見せていることから、TK216型式期と考えられる堂山古墳例まで年代を引き上げることはできず、TK208型式期かそれ以降の年代を当てはめるべきものである。さらに、TK208型式期とされる京見塚古墳の器形に関連があると考えられることから、TK208型式期、あるいはその前後から大きく後退することはないと考えられるため、消極的ではあるが上限をTK208型式期に求めることが可能である。埴輪の製作技法からは残念ながら下限を特定することが出来ないのであるが、相伴する須恵器がTK23型式に位置づけられるものであることから、石ノ形古墳出土埴輪の下限はTK23型式期かそれに僅かに遅れる頃と考えたい。あえて特定するならば「磐田型埴輪」、特に京見塚古墳の影響下にあるものとして、その時期のTK208型式期より大きく降るとは考えられず、TK208型式に後続するというでTK23型式期に位置づけたい。

石ノ形古墳の築造以降、「淡輪技法」「須恵器系埴輪」を採用しない古墳を求めて周辺に目を向ければ、磐田市甌塚古墳(静岡県1990)、同市安久路古窯(磐田市文化財保存顕彰会1987)、袋井市内では川合坊主山古墳(袋井市1993)などがあげられる。しかし、これらの埴輪ではすでに外面2次調整を施さないうえ、1次調整には積極的にタテハケ調整を用いていることで、石ノ形古墳例の直接の系譜にはつながらないものとする。つまり、B種ヨコハケ技法と「磐田型埴輪」の影響は、石ノ形古墳を最後に、遠江地域から姿を消したことが推測できるのである。

以上、石ノ形古墳の円筒埴輪は、周辺の埴輪と比較して独立した状況、他には類例の見られない独特な特徴を有していた。つまり、当時、周辺地域に分布を広げていた「淡輪技法」「須恵器系埴輪」から直接の影響を受けない埴輪製作工人と、石ノ形古墳の造営者は関係を持っていたことが明らかになったわけである。石ノ形古墳が採用したB種ヨコハケ技法と窯焼成技術の組み合わせは、最初に堂山古墳に採用された。堂山古墳の被葬者は畿内勢力との堅いつながりを保持していたものと考えられているわけであるが、B種ヨコハケ技法はその後、深く定着することなく、埴輪生産の面からいえば、淡輪・尾張地域との結びつきを強めることになった。そのような状況のもと、石ノ形古墳の築造にあたって、その造営者は周辺で隆盛していた「磐田型埴輪」、隆盛しつつある「須恵器系埴輪」をストレートに採用せず、「磐田型埴輪」の影響を受けながら畿内系の流れを汲む「B種ヨコハケ系埴輪」を採用するに至った。「磐田型埴輪」は、すでにこの時点で製作が下火になっており、鈴木氏のいうⅠ類(「磐田型埴輪」)からⅡ類(「須恵器系埴輪Ⅱ類」)への変換期を迎えた時期であることから、石ノ形古墳の造営者は、製作が終焉を迎えつつあった「B種ヨコハケ系埴輪」と「磐田型埴輪」の双方の影響下にある埴輪を、石ノ形古墳の円筒埴輪に採用したことになる。その時期は、TK208型式期を上限とし、TK23型式期を中心とした頃であったと考ええる。

石ノ形古墳の円筒埴輪が、なぜこのような独特で、かつ唯一の円筒埴輪を採用することに至ったのかについては、本稿では説明できるだけの資料・考察を提示できない。ただ、「淡輪技法」、「須恵器系埴輪」を採用しないという造営者の明確な意志を窺うのは、誤りでないと思う。京見塚古墳の被葬者(あるいは造営者)とは何らかの関係を持しつつも、石ノ形古墳の被葬者と「須

「恵器系埴輪」を採用した周辺の古墳の被葬者とは、なんらかの隔絶があったものと考えているが、その点については、今後の地域研究の深化を待つこととしたい。

5 おわりに

以上、石ノ形古墳の円筒埴輪について検討を行ってきた。底部のみの個体と原位置から遊離した小破片の埴輪から推測に推測を重ねてきた論であり、研究者の方々からのご批判を仰ぎたいと考えるが、今後、さらに周辺での調査が進み、より正確な石ノ形古墳の埴輪の様相が判明することを期待したい。外面調整技法の畿内から各地域への伝播は、窯焼成技術の伝播と共に、埴輪生産における畿内と各地域の結びつきをはかるうえで有力な手がかりになるものと考えている。今回の検討にあがった石ノ形古墳の円筒埴輪は、外面調整技法が伝播した後、その地域の在地的な技術と融合を図りつつも衰微していく状況を提示するという、貴重な資料と位置付けられるものである。今回は、その位置付けを検討したのみで、「淡輪系」「須恵器系」との積極的な比較検討を行うまでには至らなかった。埴輪生産の各地域での特質を考えるうえで、今後の検討課題とする事でご寛容願いたい。

最後に、小稿を成すにあたっては、赤塚次郎氏、一瀬和夫氏、設楽博己氏、鈴木敏則氏らの先学の研究に導かれる点が多大でありました。特に鈴木敏則氏の研究には、多くの点で参考にさせて頂きました。また、白澤 崇氏、米田文孝氏には今回の執筆の機会を与えて頂きました。明記して、各研究者の方々に深く感謝の意を表します。

(1999年1月)

【註】

- 1 兵庫県加古川市行者塚古墳などで、その可能性が指摘されている(加古川市教委1997p.16~17)。
- 2 応神陵古墳の中堤には、Bb種ヨコハケが主体を占めているものとされるが、外堤出土埴輪にはBc種ヨコハケも多く含まれている(一瀬他1981)〔埴輪検討会1998〕。これは、応神陵古墳の造営期間、埴輪生産の時間幅を考慮しなければならない問題であるが、堂山古墳においても一瀬分類によるBa種・Bb種・Bc種ヨコハケが混在しているのは、同様の様相を呈しているものといえよう。なお、設楽氏がBd種と考えておられるFig. 4-2〔磐田市教委1995:図48・222〕は、実測図で見る限りBc種ヨコハケとして良いものと思われる、中段のBb種風に見えるものは、積み上げ時の作業中断箇所を示している可能性が考えられる。また、Bc種ヨコハケは突帯2段分が完存しないと認定できないため、実測図に示されている以上にBc種が存在する可能性を考えねばならないであろう。よって、古谷 毅氏が指摘されるように、これらの埴輪のみを新しく位置づけて考える必要はないものとする(古谷1996)。このような点で、堂山古墳の円筒埴輪は、一瀬分類のCa種ヨコハケに対応させてもよいヨコハケ技法(AB種・B1種ヨコハケ)が高い割合で共存することが注目される。一瀬氏は、百舌鳥古墳群の一部の古墳にCa種ヨコハケの出現頻度が高いものがあること(一瀬1992b)、筆者の検討によっても一定量が含まれる様相が認められた(十河1998)。堂山古墳の埴輪がこれによって百舌鳥古墳群の埴輪製作集団の影響下にあるとするのは早計であるが、今後の検討課題となる。
- 3 ナデ調整を主体とする円筒埴輪は、各和金塚古墳(掛川市教委1981)で認められると松井一明氏が指摘されている(松井1992)。同古墳は、堂山古墳に併行するものと松井氏は考えられている。千人塚古墳(鈴木1998)においても、磐田型埴輪とは系譜を異にすると思われるタテハケを用いない一群が存在する。さらにまた、後述する安久路古窯では、ナデ調整からハケ調整に調整技法が変化することが認められている。今後、外面

1次調整にタテハゲ調整を用いず、ナデ・板ナデ調整を採用する工人集団が、遠江地域で系統的につながるものとして存在した可能性を検討する必要がある。

【引用・参考文献】

- 赤塚次郎 1992 「2 埴輪の編年と種類 1 円筒埴輪 D 東海」『古墳時代 雄山閣
の研究』9
- 一瀬和夫 1992a 「古市古墳群における埴輪群の変遷—大型古墳を中心と
して—」『究証』 埴輪文化財研究会
- 一瀬和夫 1992b 「河内平野とその周辺の埴輪編年概観」『古代文化』第44巻
第9号 財団法人古代学協会
- 一瀬和夫 1998 「古墳時代前期における円筒埴輪生産の確立」『古代』第
105号
- 一瀬和夫ほか 1981 「応神陵古墳外提発掘調査概要」 大阪府教育委員会
- 磐田市教育委員会 1995 「遠江 堂山古墳」
- 磐田市教育委員会 1998 「馬坂 馬坂遺跡・馬坂上古墳群発掘調査報告書」
- 磐田市文化財保存顕彰
会 1987 「昭和61年度 安久路古窯発掘調査報告書」
- 加古川市教育委員会 1997 「行者塚古墳 発掘調査概報」加古川市文化財調査報告書
15
- 掛川市教育委員会 1981 「各和金塚古墳測量調査報告書」
- 川西宏幸 1977 「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第2巻第4号
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 静岡県 1990 「静岡県史 資料編2 考古2」
- 殷業博己 1995 「第一節 埴輪 第一項 円筒埴輪」『遠江堂山古墳』 磐田市教育委員会
- 鈴木敏則 1982 「星川古窯出土遺物」『静岡県考古学研究』13
- 鈴木敏則 1990 「遠江の淡輪系円筒埴輪」『転機』3号
- 鈴木敏則 1994 「静岡県における埴輪生産」『向坂綱二先生還暦記念論集
地域と考古学』 向坂綱二先生還暦記
念論集刊行会
- 鈴木敏則 1998 「千人塚・千人塚平・宇藤坂古墳群」 浜松市博物館
- 十河良和 1998 「百舌鳥古墳群出土円筒埴輪の様相」『網干善教先生古稀
記念考古学論集』 網干善教先生古稀記
念会
- 田辺昭三 1966 「陶色古窯址群」I 平安学園考古学クラ
ブ
- 辻川哲朗 1993 「円筒埴輪研究からなにがわかるのか」『第1回加悦町古
墳シンポジウム 蛭子山古墳の時代』
- 天竜市 1981 「天竜市史」上
- 中島郁夫 1992 「明ヶ島古墳群」『磐田市史 資料編1』
- 羽仁生保 1988 「血松塚古墳発掘調査報告書—墳丘測量及び範囲確認調
査—」静岡県文化財調査報告書40 静岡県教育委員会
- 埴輪検討会 1998 「応神陵古墳外提出土円筒埴輪の研究」『研究紀要』第4集 財団法人由良大和古
代文化研究協会
- 古谷 毅 1996 「書評 市原壽文ほか「墳丘の形態と構造遺物」埴輪研究
会誌」第2号 埴輪研究会
- 袋井市教育委員会 1993 「袋井の前方後円墳—袋井の首長墓を考える—」袋井市考
古資料集 第1集
- 松井一明 1992 「宇佐八幡境内遺跡周辺域における5世紀の首長墓と初
期群集墳の動向」『宇佐八幡境内遺跡』 袋井市教育委員会
- 山村宏ほか 1982 「京見塚遺跡群発掘調査概要」『静岡県考古学研究』11

(そごう よしかず 磐田市教育委員会)

図 版



(1) 石ノ形古墳 遠景(南から)



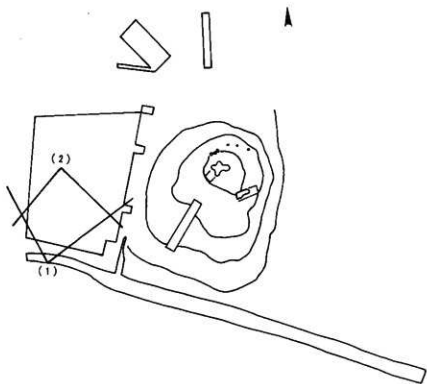
(2) 石ノ形古墳 遠景(西から)



(1) 石ノ形古墳 全景(北西から)



(2) 墳頂部 調査前の状況(南西から)

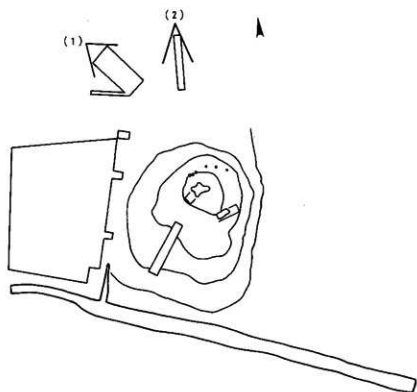




(1)周溝確認トレンチA(南から)



(2)周溝確認トレンチA(北から)

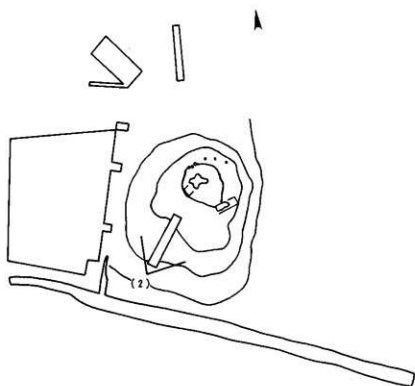
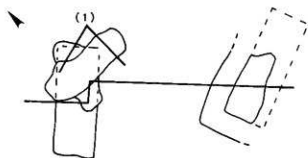




(1)周溝確認トレンチB(北から)



(2)周溝確認トレンチC(北から)

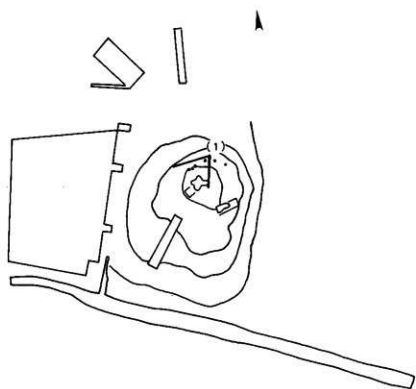




(1) 墳丘 東西土層断面(北から)



(2) 墳丘 南北トレンチ西壁土層断面(南から)

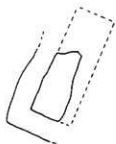
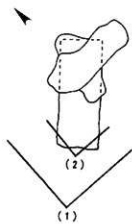




(1)円筒壇輪列 出土状況(北から)



(2)円筒壇輪(56) 出土状況(南から)

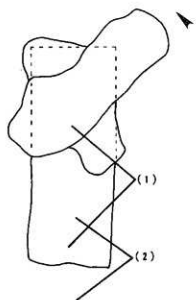




(1)西主体部 検出状況(南から)



(2)西主体部 東西主軸土層断面(南から)

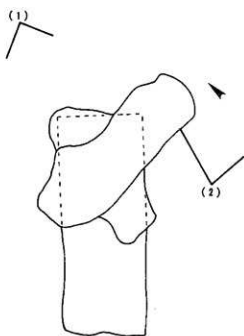




(1)西主体部 南北主軸土層断面(東から1)



(2)西主体部 南北主軸土層断面(東から2)

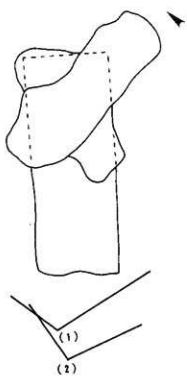




(1)西主体部 棺外遺物出土状況1(鉄斧および須恵器出土状況:北から)



(2)西主体部 棺外遺物出土状況2(鉋出土状況:南から)

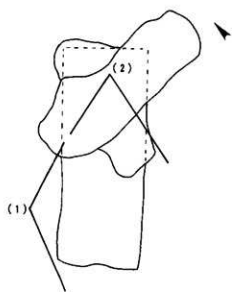




(1)西主体部 棺外遺物出土状況 3 (鉄刀および刀子出土状況:南から)



(2)西主体部 棺外遺物出土状況 4 (鉸具および須恵器出土状況:南から)

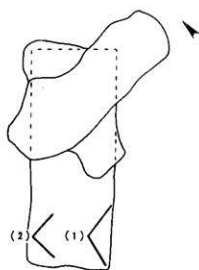




(1)西主体部 棺内遺物出土状況1(西から)



(2)西主体部 棺内遺物出土状況2(北から)

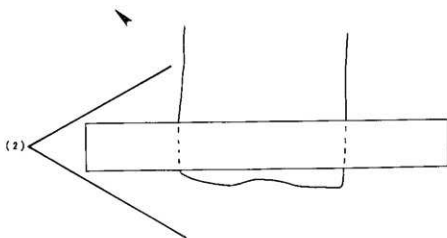
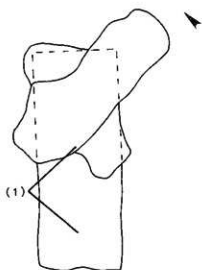




(1)西主体部 蛇行剣出土状況(西から)



(2)西主体部 短甲出土状況(西から)

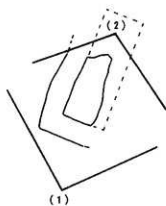




(1)西主体部 馬具出土状況(西から)



(2)西主体部 棺底部断割りトレンチ内須恵器出土状況(西から)

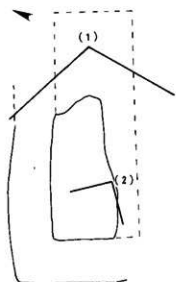




(1)東主体部 検出状況1(南から)



(2)東主体部 検出状況2(北から)

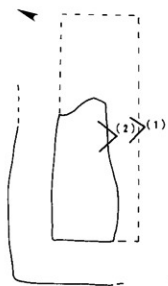




(1)東主体部 遺物出土状況(北から)



(2)東主体部 画像鏡出土状況(北から)

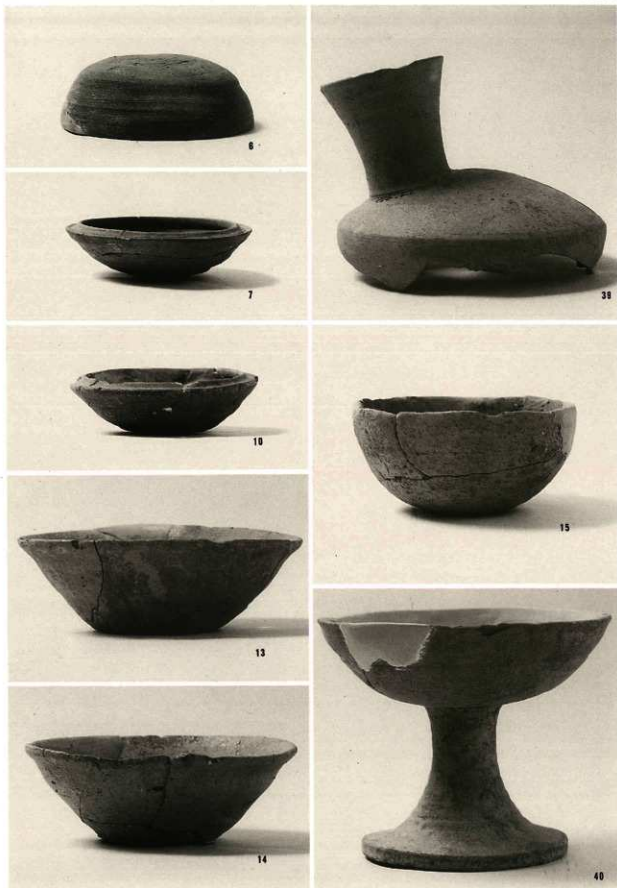




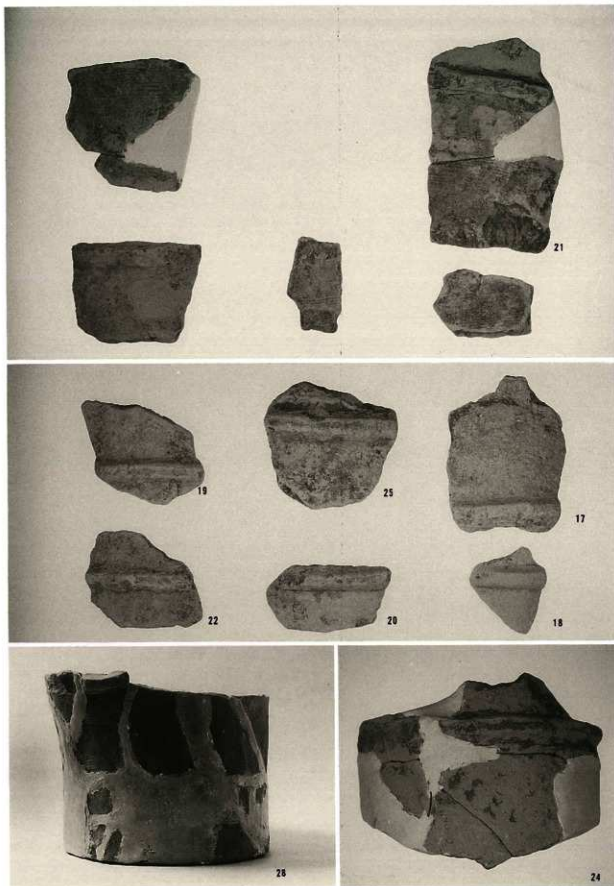
(1)東主体部 鈴銅および玉類出土状況(東から)



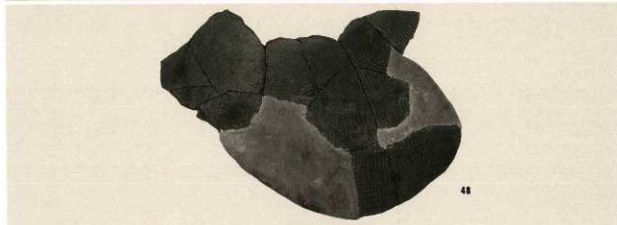
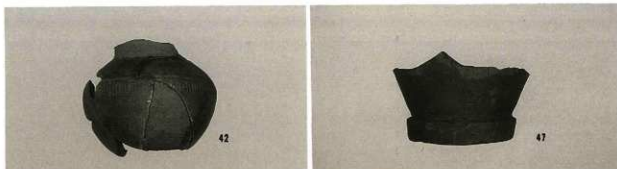
(2)東主体部 玉類出土状況(東から)



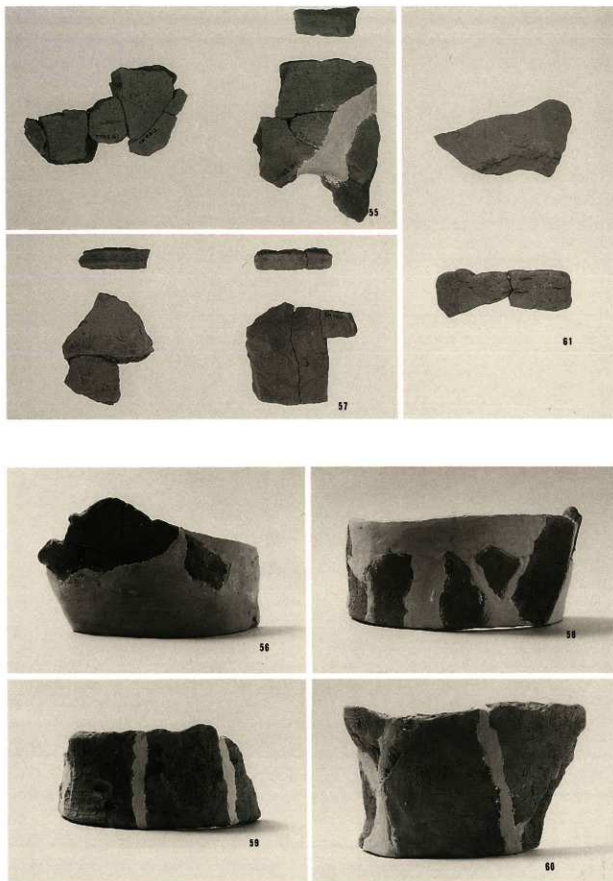
墳丘裾部および周溝内出土 土器



墳丘掘部出土 円筒埴輪

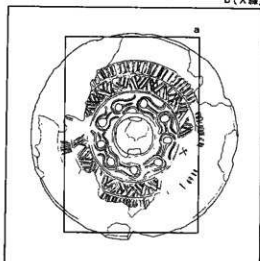


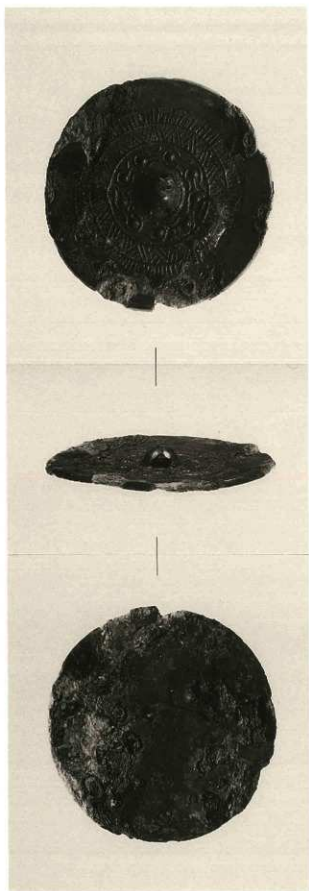
墳頂部出土 須恵器



墳頂部出土 円筒埴輪

b (X線)





西主体部出土 乳紋錢

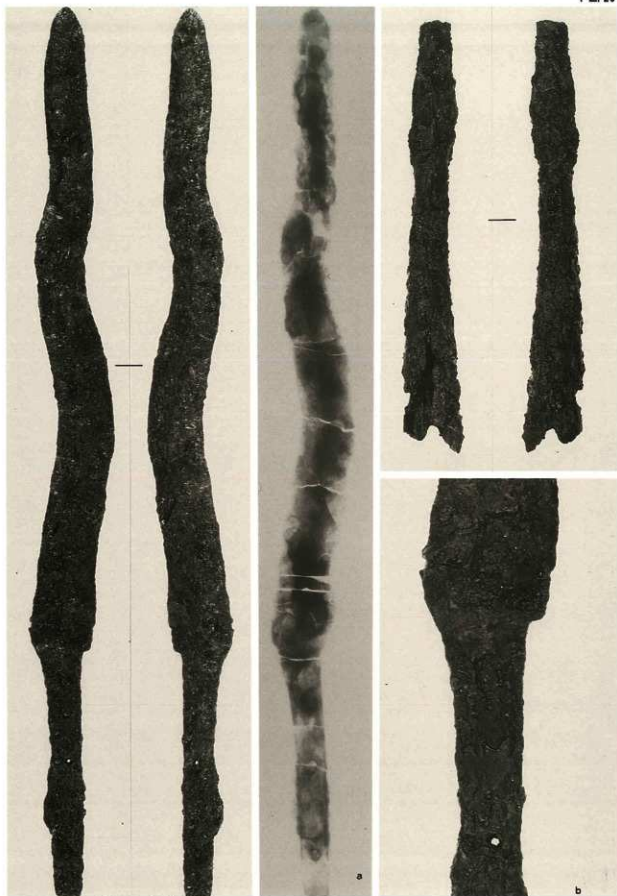




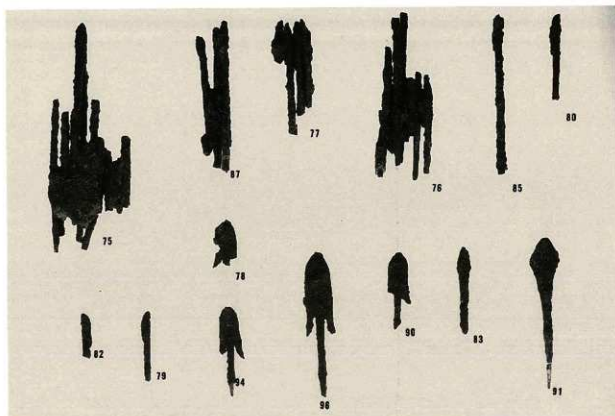
西主体部出土 刀刺類

a (X線)

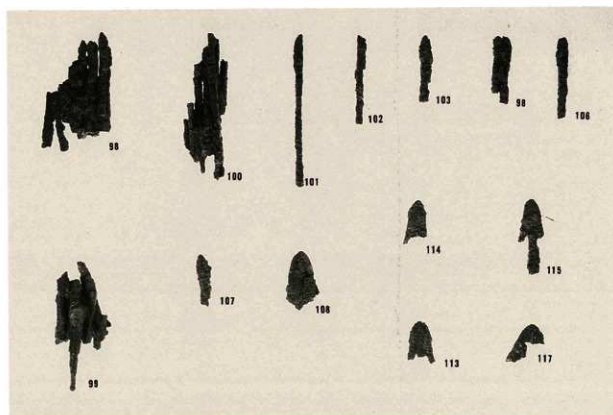




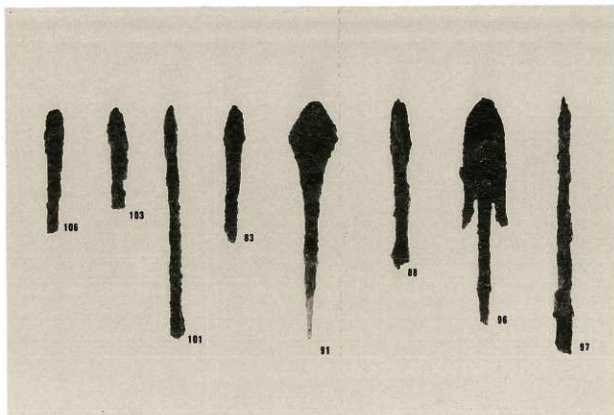
西主体部出土 蛇行刺および鉄針



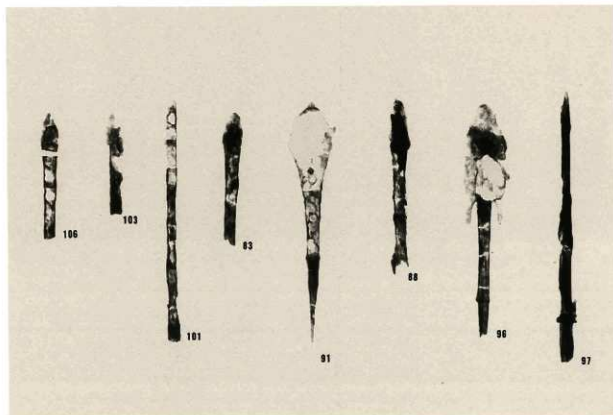
(1)西主体部出土 鉄鏃1(棺内)



(2)西主体部出土 鉄鏃2(掘乱坑内)



(1)西主体部出土 鉄鍬 3



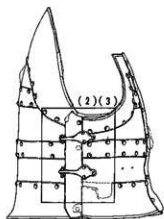
(2)西主体部出土 鉄鍬 4 (X線)

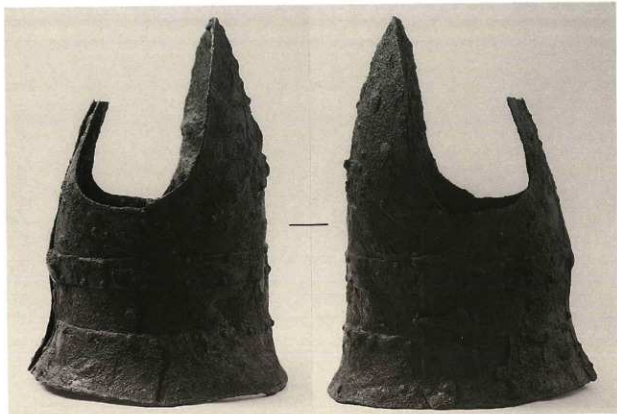


(1)西主体部出土 短甲 1 (前胸)



(2)西主体部出土 短甲 2 (後胸)





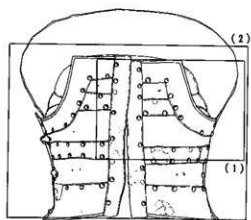
(1)西主体部出土 短甲 3 (左右側面)

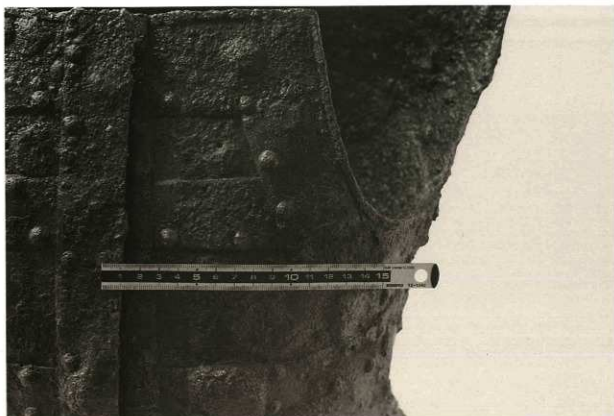


(2)西主体部出土 短甲 4 (鍔番金具)



(3)西主体部出土 短甲 5 (鍔番金具 X 線)

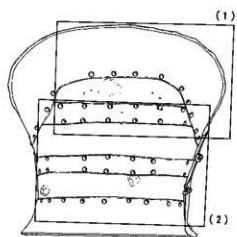


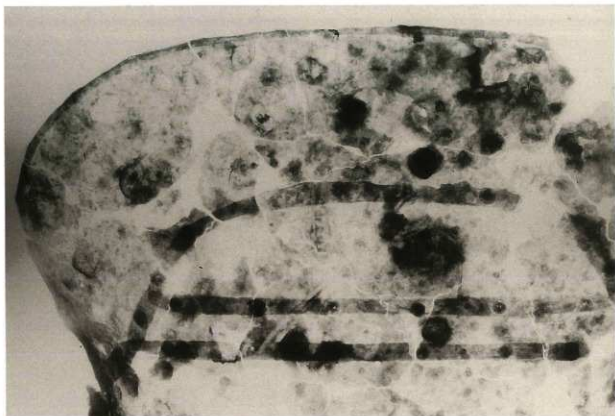


(1)西主体部出土 短甲 8 (左前肩部分)

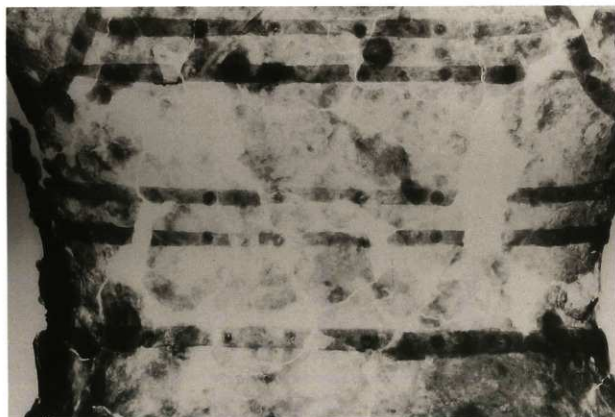


(2)西主体部出土 短甲 7 (鉄板端部加工状況)

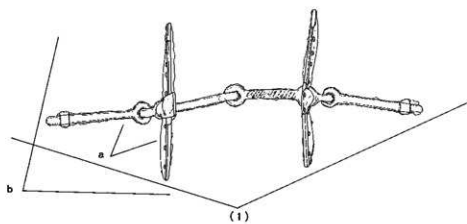


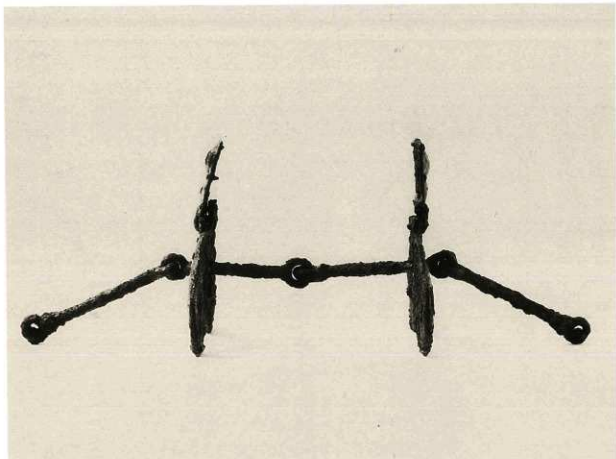


(1)西主体部出土 短甲 8 (後胴上半部×線:内面より)

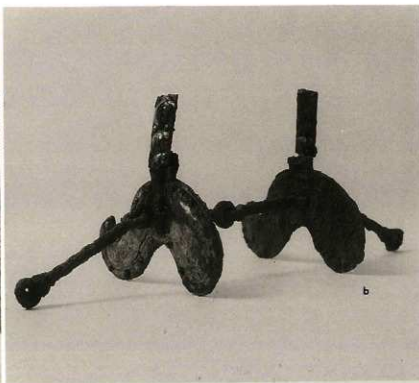


(2)西主体部出土 短甲 8 (後胴下半部×線:内面より)

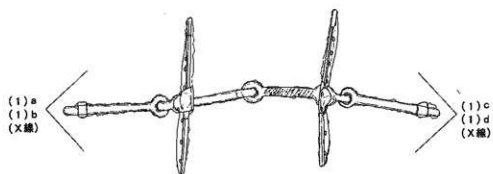


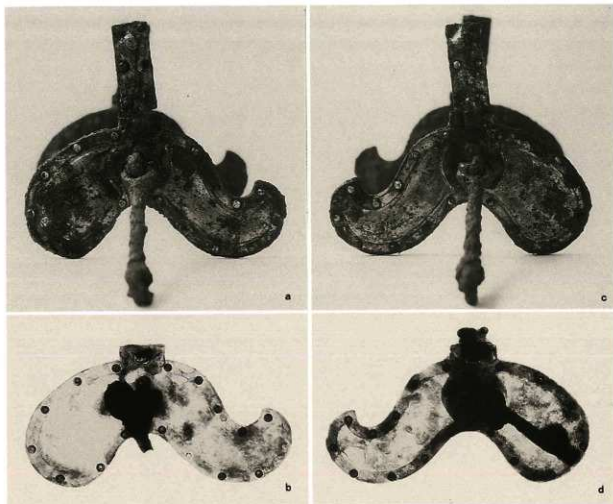


(1)西主体部出土 f 字形鏡板付轡 1 (立面)

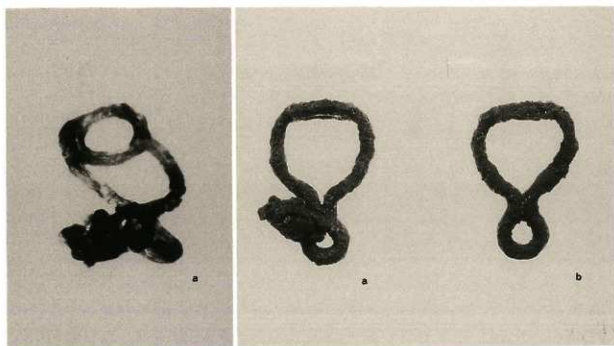


(2)西主体部出土 f 字形鏡板付轡 2 (引手接続状況)

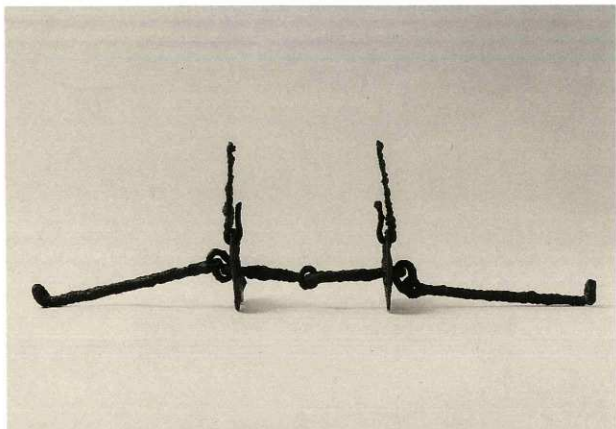




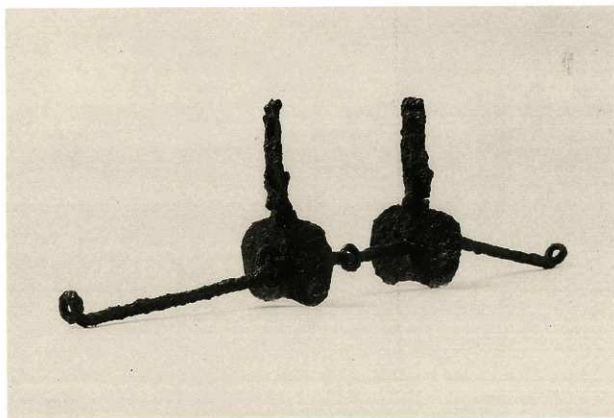
(1)西主体部出土 f 字形鏡板付髷 3 (左右鏡板)



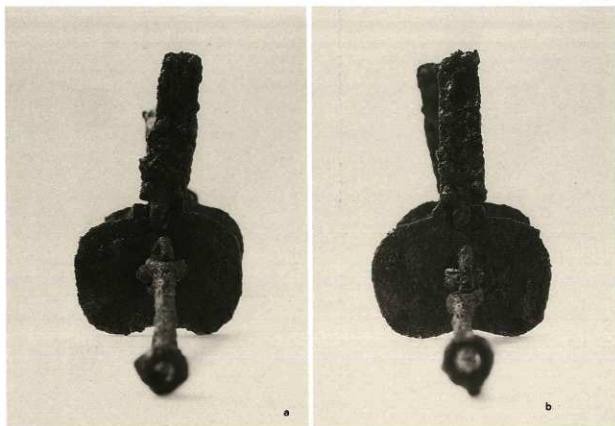
(2)西主体部出土 f 字形鏡板付髷 4 (引手壺, 番号は Fig.47に対応)



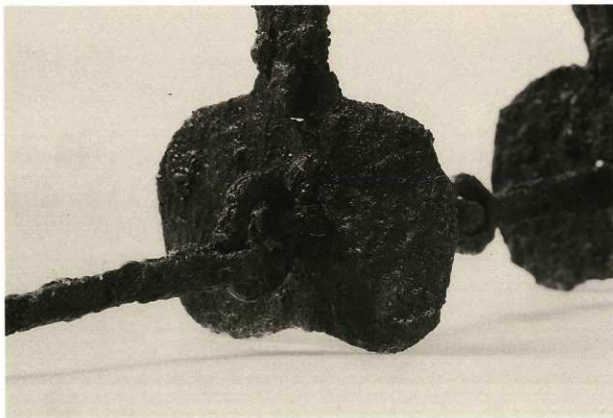
(1)西主体部出土 鉄製楕円形鏡板付簪1 (正面)



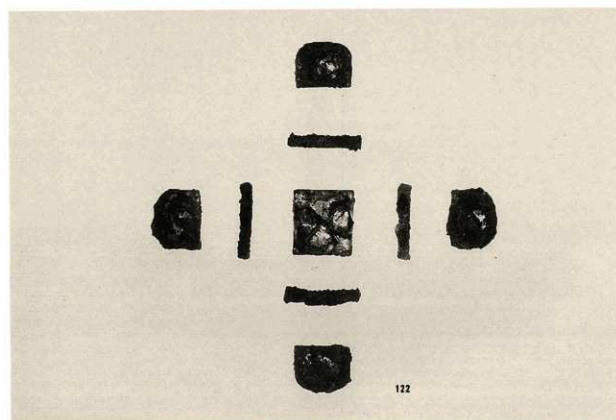
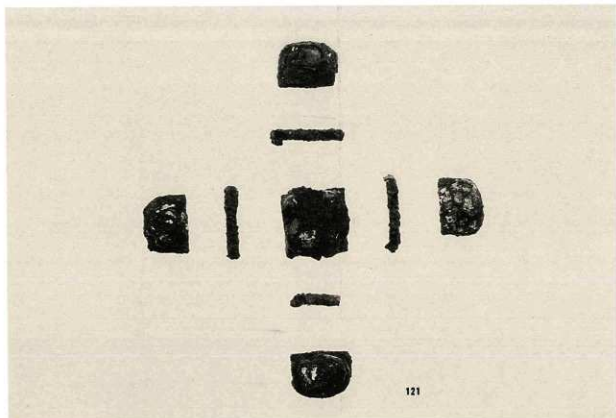
(2)西主体部出土 鉄製楕円形鏡板付簪2 (側面)



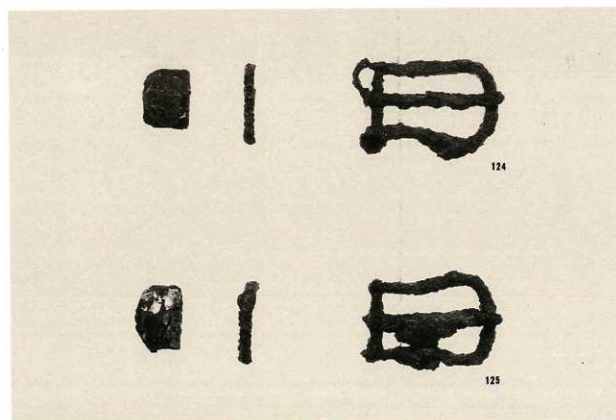
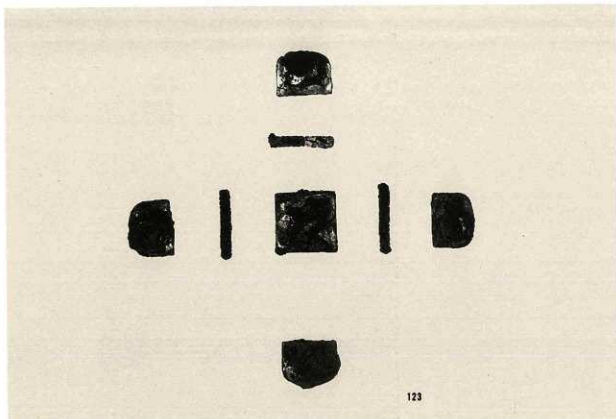
(1)西主体部出土 鉄製精円形鏡板付轡 3 (a:左側面, b:右側面)



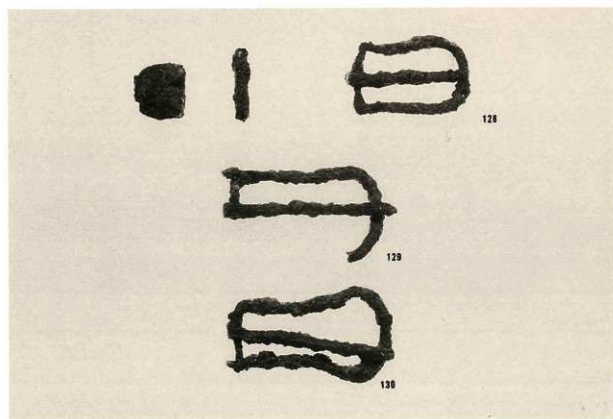
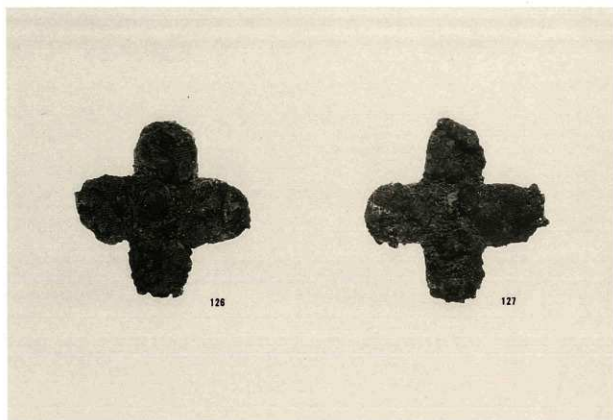
(2)西主体部出土 鉄製精円形鏡板付轡 4 (引手接続状況)



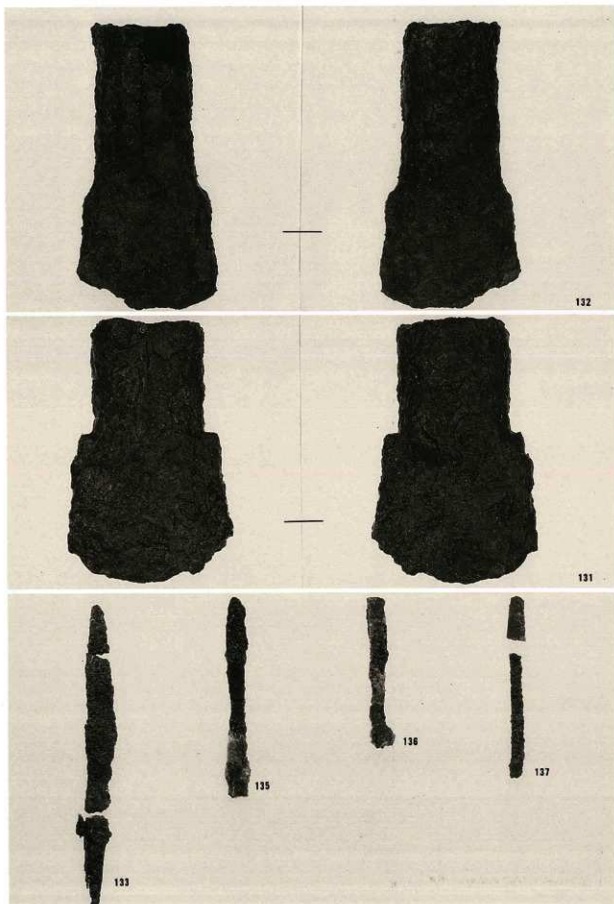
西主体部出土 迁金具



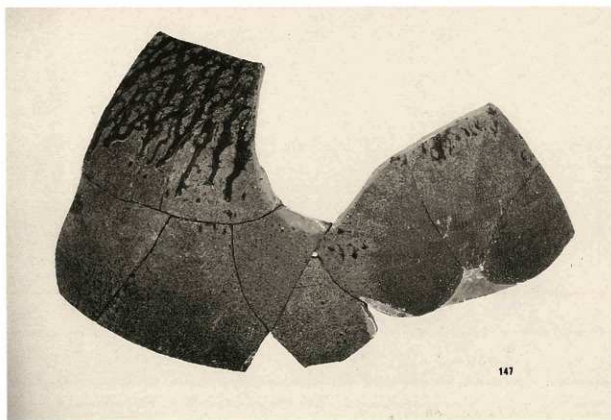
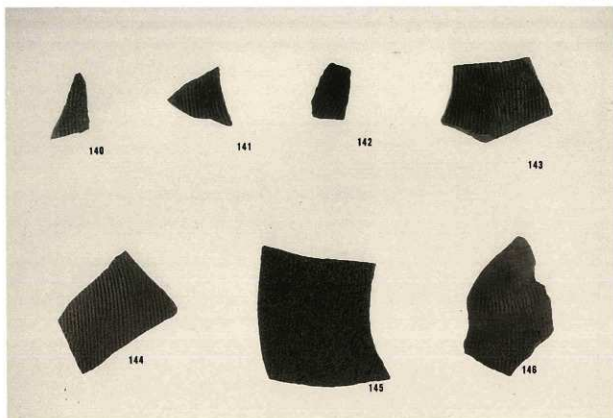
西主体部出土 透金具および鉸具 1



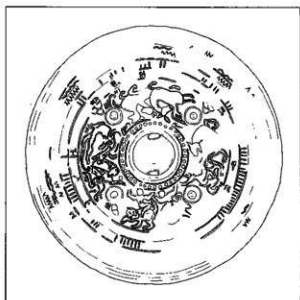
西主体部出土 辻金具および絞具 2



西主体部出土 生産用具

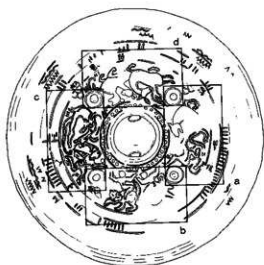


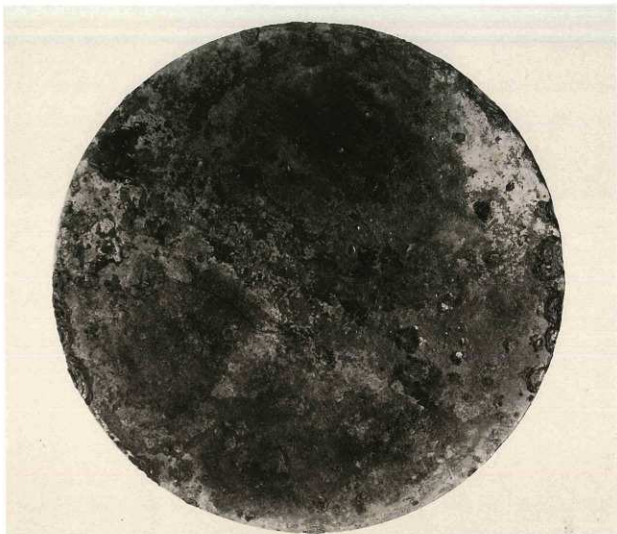
西主体部出土 須惠器



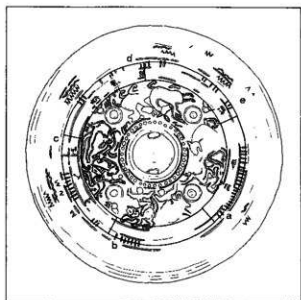


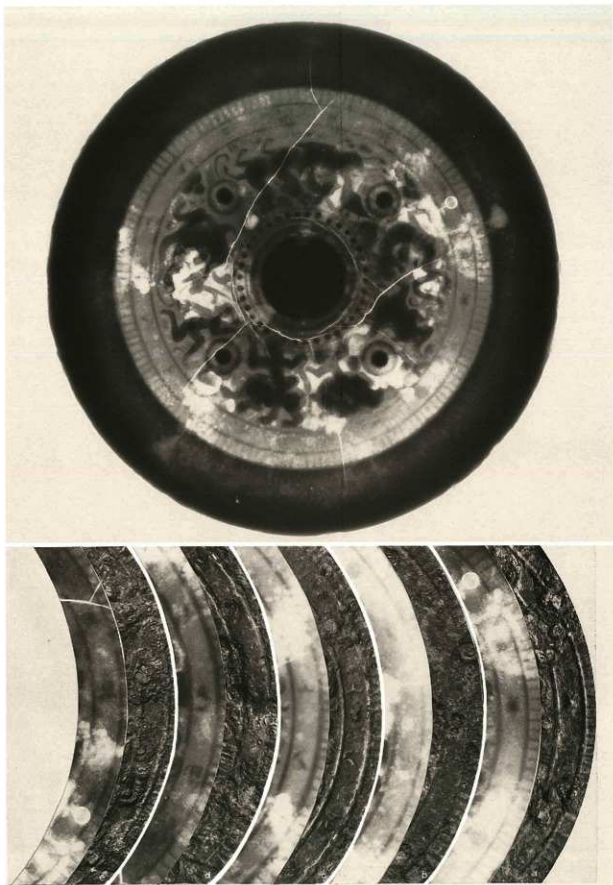
東主体部出土 画像鏡1 (鏡背および俯角)



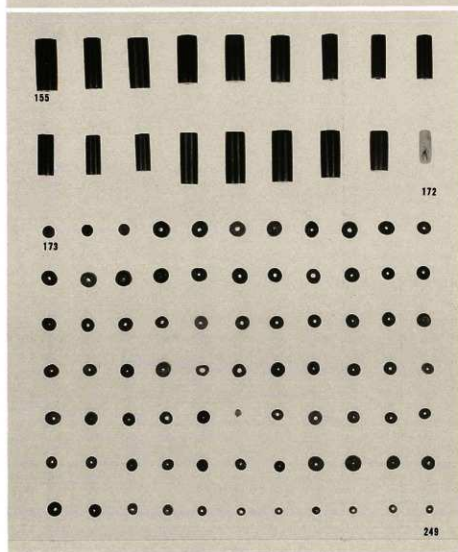
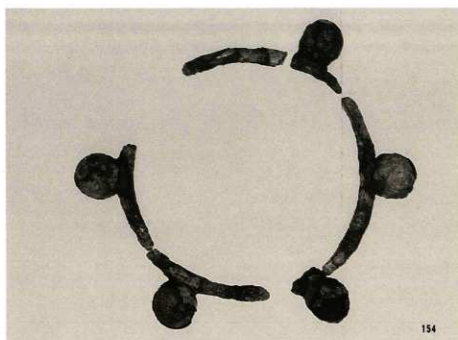


東主伴部出土 画像鏡 2 (上: 鏡背, 下: 紋様帯細部)

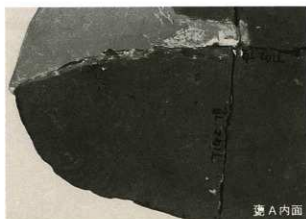




東主体部出土 画像鏡3 (上:鏡背×線,下:銘文帯細部)



東主体部出土 鈴鋼・玉類および鉄刀



壺A内面



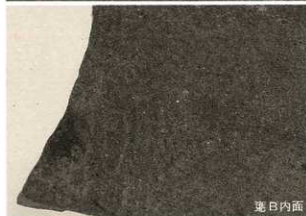
壺A外面



壺B内面



壺B外面



壺B内面



壺B外面



壺C内面



壺C外面

石ノ形古墳出土 須恵器壺内外面調整細部

報告書抄録

ふりがな		いしのがたこふん					
書名		石ノ形古墳					
編集者名		白澤 崇					
編集機関		袋井市教育委員会					
所在地		〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1 Tel.0538-44-3141(直通)					
発行月日		1999年3月19日					
所収遺跡名		いしのがたこふん 石ノ形古墳					
遺跡所在地		しずおかけんよくえいしにほんごういしのがた 静岡県袋井市国本字石ノ形333-1・332-1・332-3・331-3ほか					
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号	34° 45' 40"	137° 57' 47"	19930421 ↓ 19930819	200㎡	副葬品の露出による緊急調査。	
22216	109						
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
石ノ形古墳	古墳	古墳時代 (中期)	木棺直葬主体部2 円筒埴輪列 周溝	須恵器 円筒埴輪 青銅鏡 鈴釧 玉類 刀剣類 蛇行剣 鉄鉾 鉄鍬 短甲 馬具 鉄斧 刀子	造り出し付円墳		

石ノ形古墳

1999年3月19日発行

編集 静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1

印刷・製本 株式会社 図書印刷 同朋舎

京都市下京区中堂寺鍵田町2